

「半分丈け？」

「ウム、彼奴餘り逃げるから。」

見ればどの子供の頭もクル／＼に青坊主だつた。その頭を互になでたり、擦つたりして巫山戯た。

次の日の午後、俊一が感化院の柵にそつと近づいて見ると子供等は畑で働いてゐた。齋藤一人が頭に手拭を被つてるのだ。

「やア、小畑さん。」西田は農夫長の眼を盗んで柵のすきから低い聲で呼んだ。「齋藤の頭見て見さい！」西田はいきなり齋藤の後から飛び上がるやうにして手拭をとつた。齋藤は狼狽した。彼の頭はシベリヤの四人のやうに左半分丈け青坊主になつて右半分には眞黒い毛が生えてるのだ、彼はその坊主の方を左手で間が悪さうに搔いた。俊一は急いで其處を離れた。

夕食後子供等はガヤ／＼話し乍ら俊一の部屋に近づいて來た。いつも俊一の處へは殆んど來たことがない「丸太」が加はつてゐた。「丸太」は實際ズバ抜けて圖體が大きかつた。然し彼は全くのかかけなのだ。十八にもなるのだが、舌が長くて思ふやうに廻らず、いつも涎を垂らしてゐた。

子供等から、「おい丸太、貴様の舌はなんぼや？」と聞かれると、「一てん五厘。」と答へてニヤ／＼笑つてるのだ。彼は感化院に來る前は山の炭焼き小屋で常に姉と一つ蒲團に寝て、してゐたのだと得意になつて話す奴だつた。圖體が大きい力がなくて臆病で、仕事にまともりがなかつた。毆られれば直ぐに大聲を擧げてワン／＼泣くのだ。彼はいつか一人で柵を抜け出して此の山に住む亞炭掘の若いお内儀さんをしようとして、あべこべにお内儀さんから散々ぶん毆られ蹴飛ばされてワン／＼泣いて歸つて來たのだ。山に住む亞炭掘の部落の人々は寒い此の地でも年の半分以上は殆んど全裸體で暮す瘴猛な人々なのだ。「丸太」は復讐をした、そのお内儀さんの四五歳なる子供の兩足頸を引つ捉へて頭の上高く翳してグル／＼振り廻してから藪の中に抛り投げて來たのだ。彼は全くのかかけだつた。

「俺がおぼこ(子供)の時はとつつかんがいつもさうしだんだ。」「丸太」は、常になく何か言ひ張る調子だつた。子供等にワイ／＼圍まれて半分坊主の齋藤が柄にもないやうに間が悪がつてゐた。

「小畑さん、ね、石油少し許り呉んか？」西田が俊一の前に飛んで來た。

「石油？ 石油なんか何をするのだ？」俊一は顔をしかめた。

「ウム。齋藤の頭を燃やすんですが。少しでいゝのツシヤ。」

俊一は彼等の説明をきいた。で澁々石油入れを出してやつた。西田は大はしやぎに喜んだ。俊一は彼等のする事を見てゐた。「丸太」が常になく總て心得顔にやるのだ。彼は齋藤の髪の毛に石油を垂らした。次に新聞紙で擦つた。それからマツチを擦つてその髪の毛に火をつけた。齋藤は両手で手早く揉み消した。

「どうだ、熱いか？」子供達は訊いた。

「ウムウ。」齋藤が答へた。

「俺がおぼこの時はいつも斯うしたのさ。」丸太が云つて、又石油を少し注いだ。齋藤の髪の毛は一部分丈けチリ／＼に焼けてゐた。俊一は全くあきれたが、黙つて彼等を見てゐた。又火をつける、又手早く揉み消す、幾度にもやつて到頭半分の頭は焼けてしまもた。だが、毛の先が茶色に縮んで圓まつて、左とは均等にならないので、却つて滑稽に見えた。齋藤はしきりに頭をこする、ブン／＼動物質の臭氣と石油の匂ひが漂つた。

「小畑さん、有難う！」彼等は石油の禮を云つてから、喊聲を擧げ乍ら引き上げて行つた。

齋藤の頭は幾日たつても焼け切れた方ではこぼこで、他の半分は揃つて毛がのびて來た。それでも彼は折々感化院を逃げ出した。全くいつの間にも逃げるのか分らない。

「齋藤、お前何故逃げるんだ、もう逃げるなよ。」或る日、俊一は彼が一人であるのを見つけて云つた。

「ウム／＼、もう逃げいん、逃げいん。」彼は何と思つたか急にポロ／＼涙を流して泣き出した。

「泣かなくともいゝよ。もう逃げるなよ。」

「ウム／＼。」彼は手の甲を眼に當てゝしやくり泣いた。

「よし／＼。かへれ！」

俊一は、眼から手を離さずに行く彼の姿を見送つた。肩がヒク／＼と高くなつたり、下がつたりした。

それから十日間許りは逃げなかつた。だが又逃げた。

感化院の子供等の茸狩りがあつた。日曜の朝、農夫長を先頭にして草鞋をはいた子供等が二列

に列をつくり、嬉しさうに出發するのを俊一は見た。

「小畑さん！ 行つて來すて！」彼等は籠を持つてる手を高く舉げて挨拶して行つた。眞に彼等の顔は喜びに溢れてゐた。俊一は山の奥に進んで行く彼等を見送つた。

夕暮方子供等は歸つて來た。畑山等は歸り途に俊一の處に急いで寄つた。

「なんの二里の上も奥山迄行つたのツしや。これ見さい。」彼等は、籠の中を見せた。そして茸の上等のところを少し縁側に置いた。「小畑さんさんべと思つて別に置いて置いたのツしや。ウム、いゝから。」彼等は落ちついてゐなかつた。

「小畑さん、小畑さん、これ！」畑山は一つの井を見せた。「二里も山ん中にあつたのツしや。あの新米の野郎があすこで飯を食つたんだね、あんな山の中で。矢張り山を逃げした。俺の云つた通り。」

「小畑さん。さいなら。ウム、又來す！」彼等は喜びの興奮に全く疲れてゐないやうに元氣だつた。農夫長の眼を偷んで來た彼等は急いで走り戻つた。

あの慣れつかない新米は矢張り南へ逃げたのだつた、そして何處からも送り返されなかつた。

## 二十四

此の間迄あんなに啼いた蟲の音がヒタと止んで了つた。朝、薄く霜が置いて、それが日に溶けキラ／＼露になつて光るやうになつた。木の葉はすっかり枯れた。そして地に落ちた。落葉は朝は霜にいためられてグツシヨリしてるが、晝は乾いて秋らしく匂ひ、夕方はどうかすると薄寒い風にかサコソ音を立てた。庭の隅ではクル／＼舞つては靜まつた。ゴーツと風が來て、家の中を吹き抜けた、臺所の方でカタコト音がする。だが風は裏の縦林で喰ひ止められた。ふツと風が止むと、胸の中もやつと温かさを恢復した。だが又ゴーツと吹いて來た。俊一の胸の中迄も薄寒い風が過ぎて行つた。その風に市街の方から送られて、軽い黒マントを着た傳三が山に押し上げられて來た。彼は勢ひ込んでゐなかつた、しよ、げ、てもゐなかつた。彼は疲れてゐた。ランプの前で互の間に薄紙が挟まつたやうに二人は顔を合はせた。一ヶ月振りで會つたのだ。

「……ね、俊ちゃん。僕は民子さんと將來の約束をしようと思つたのだが、どうだらう！」

「それはいゝぢやないか。」俊一は答が躊躇してはいけないと思つた、さればと云つて、「結構だ、素的だ、素的だ。」と餘りわざとらしく云ふわけにも行かなかつた、でさう答へた。

「今日の午後あの人が来て呉れたんだ。あの人は僕を愛してゝ呉れる、あの人と一緒にゐると僕の心はひき締るんだ、僕はあの人に依つて救はれるやうな氣がするんだ。」

「さうだ、あの人は君を眞個に心から愛してるよ、僕は君等が早く堅い約束をするのを心から待ち望んでゐたんだ。」

「ウム。有難う、ね、僕は決して今日とか昨日とか決心した積りぢやないんだ、此の間から随分考へた積りなんだ。」

「ウム。君は最初から民子さんを愛してゐたんだ。僕は、二人のために心から喜びの言葉を捧げる。」

「有難う。ね、僕は約束する、あの人と約束する。僕はあの人に依つてのみ救はれる。」

「ウム。早く約束し給へ。」

「ウム、有難う。」傳三の顔は耀いた、彼は民子と清い美はしい生活をする一瞬間の中に空

想した。餘りに幸福すぎた。自分の幸福に許り酔ふべきでない、此の友も幸福であつて呉れ、それは如何に美はしい生活だらう！ で彼は初めて相手の事を考へた。「あゝ、さう、君は近頃學校を休む日の方が多んだつてね。一寸先日路上で聞いたんだが。」

「誰かさう云つてた？……」俊一は黙つて了つた。

「ウム、一寸聞いたんだ。あんな學校止めよ。全くくだらない！ 俊ちゃん、高等學校へ入れ、そして大學へ行くさ。君の頭であんな學校にゐるのは惜しいよ。」

「さや。」

「どうして？」

「だつて僕がこれから大學迄なんか行けるか。」

「行けるよ、君のその頭で。」

「いや、僕はこれから實際的に働きたいんだ、それが人間として眞實だ。」

「ウム、それも眞實ではある、だが大學をやつて悪いと云ふ理由はない。」

「だつて僕は金もない。それに大學をやつたからつて人間になれるわけではない。」

「金？ 金なんかどうにもなるよ！」傳三は自分の今描いた空想のプログラムには此の友人が立派な理學者になつてゐねばならぬ筈だつた。俊一は數學がよく出来た。で、傳三は相手の云ふ事には耳を假さなかつた。一人でいき込んでゐた。「實際金なんかどうともなるものだ！ やれよ、やれよ、それが一番素的だ！」

「だつて駄目だ。俺は今眼の前にやらねばならない事があるんだ。」

「少しも駄目でない、先づ第一にあんな學校を止めよ。」

「ウム。でもそれも金がないから困つてるんだ。」

「何故？ あゝ辨濟しなければならぬのか、そんなもの幾らでもないさ。」

「……………」

「一體いくら位になつてるんだ？」

「ウム……………」

「大した事はあるまい！」

「前のも合せて四百圓足らずになる、まア四百圓だ。」

「四百圓？ それ位なら何でもないさ。ね、俊ちゃん、ね、それを僕に辨濟させて呉れないか？」

「いやだ、そんな馬鹿な事。」

「眞個にそれんばかし何でもないよ、ね、それんばかしで何かと云ひ度くないんだが、困つたな、えゝと、ね、ちやいつでも君が出来た時、いつでもいゝんだよ、返して呉れ、さうすればいゝだらう！」

「眞個か？ でもいけない、君はまだ君のお父さんの厄介になつてるんだもの。」

「そんな心配しなくていゝ、僕は、少し許りだけれど、父から貰ふものがあるんだ、決してそれん許りで心配しないで、ね、ね、いゝだらう、さうして呉れ、眞個にあんな學校止したがいゝ、ね！」

「ウム、眞個にいゝのか。…………でも、僕は實際働く積りでゐるんだが、いつ返せるか分らない。僕は矢張り氣持が悪い。」

「だからそんな心配するなつて云ふんだ。俊ちゃん、俺の心が分らないのか？ 何でもないんだよ、さう云つては悪いが四百圓や五百圓は眞實に何でもないんだ。」

「ウム。僕にも極く少しだが、ほんの極く少しだが貯金もあるんだ。」俊一は顔を赤くした。「だから三百五十圓でいゝ、貸して呉れないか、改めて僕はお願ひする。」

「三百五十圓だなんかと云はなくていゝ、そんな改まらないで。君が働くつて、矢張り勉強した方がいゝよ。」

「いや〜、それはもう勸めないで呉れ、僕は先づ第一にせねばならない事があるんだ。」

「俊ちゃん、いやだよ、そんなに改まつて、兎に角近いうちに金は持つて来て上げる。」

「いや、僕が借りに行く、決して無理しないで呉れ、出来た時でいゝんだから。」

「ウム、無理なんかであるものか、兎に角待ち給へ。」

「ウム、有難う。」

「ちや今夜は僕かへるよ、もう随分遅いだらう。」

「まだそんなでもない……でも眞個に借りてもいゝのか？」

「いゝよ〜。駄目だ、そんなクヨ〜して。決して心配しないがいゝ、兎に角今夜はかへる。」俊一は坂の途中迄友人を見送つた。

「ね、民子さんと早く約束したがいゝ。」

「ウム〜、大丈夫だ！ ちや心配しないで、さよなら。」

「さよなら……」

幽かな月光に照されて、自足の感じに胸を充たされてる傳三は橋の方に下つて行つた。坂を登り乍ら俊一はチラと空を見た、だが月は何處にあるのか見えなかつた。極く少しではあるが、まだ風が吹いてゐた。川の音がサラ〜と寒かつた。彼は身を縮めた。彼はどうしても新しいシャツを一枚買はねばならぬと思つた。今病氣なんかしては何ものかに對して済まないと思つた。これから何をするのかは分らないが、身體は大切だと思つた。ふとシャボンが頭に浮んだ、随分儉約に使ふのだが、もう直ぐに買はねばならなかつた。彼は恐しく潔癖だつた。その夜の中にスワルツへ手紙を書かうかと考へ乍ら山門をくゞつた。だが部屋に這入ると、彼はぼろシャツをランブの前に持ち出して、糸と針で繕ひ始めた。彼が針を取るとは誰も想像も出来ないのである。然し彼はそんな仕事を無雑作に而も上手にやつた。

翌る朝遅く、もう十時過ぎに傳三は自分の部屋で眼を醒ました。そして一度頭を動かして見てから、再びぐつたり軟かい枕に埋めた。

(おや、俺は昨夜あの男の顔を見ると直ぐ民子さんと約束をする氣だなんかと喋つたな。又俺は出鱈目を云つた。而も、今日や昨日決心したんぢやない、よくよく考へたんだなんかと云つた。あゝあゝ、俺は何と云ふ奴だ！ あの民子さんを、一個の女性を、さうも手易く約束するなんかと云ふ事が出来るか、此の俺が。何と云ふ冒瀆だ！ 一體俺の意志は何處にあるんだ、此のフラフラのやくざが！ 俺は生きてゐて何の役に立つのだらう、あゝあゝ、俺はどうすればいゝんだ、皆俺を置いてゆく、世の人々はズン／＼生きて行く、進んでゆく、それだのに此の俺のやくざめ！ あゝあゝ) 彼は蒲團の天鵞絨の襟に顔を埋めた、そして涙を流して泣いた。いつもの朝、目を醒ました暫くの間丈け自分自身の姿がはつきり見え、そして此の世からぼつたり一人取り残された

感じに襲はれて泣くやうに、此の朝も泣いた。十分、二十分、或はその上も過ぎた。

(……だが俊ちやんは全く困つてるんだ、眞の生活をしようと思ふ者があんな學校にゐられるものか！ 恐ろしい虚偽の場所、實は神を潰し切つてる場所だ、どうして／＼、俊ちやんは何はともあれ何かやらかす男だ、それが僅か四百圓の金で困つてる、それを俺が助けてやる、いや唯ほんの助太刀をしてやる、何と云ふ嬉しさだ！ さうだ、俺は金で出来る位の事丈けはしてやられるのだ、俺は何と云ふ可愛い奴だ、何と云ふ愛に満ちた奴だ、友情より美しいものがあるか、さうだ、愛だ、愛だ！ 美はしい愛、それが即ち此の世に天國を來すものだ！ プレークのあの歡喜に満ちた愛に充ちた、輝く、そして生きてる繪を見る！……)

彼はいつ迄も温かい床から離れなかつた。柱の繪を眺め、銀の藥罐のチン／＼湯氣を立てる音を聞いてゐた。……

朝の珈琲を飲み、パンとハムを嚙り、次にソオファに身體を投げて、煙草を卷いた。それを半分も喫ふと、灰皿にボンと投げ捨て、又クル／＼煙草を卷いた。(今夜は會ふ筈である) 彼は滿津緒に會ふ歡びを淫蕩な快感で回想し胸を跳らせた。(だが、その前に俺はせねばならぬ事がある、

あゝさうだし

二〇八

「オイ、清や清や！」彼は如何にも主人らしく呼んだ。

彼は清やを呼び自分のその月の小遣の残りを計算した、六十圓位しか現金はなかつた。

「よし／＼、もう向うへ行け！」彼は清やを追ひ飛ばした。短くなつた煙草の煙が眼に這入つたので彼は大袈裟に顔をしかめた。

傳三は裏木戸から這入つた。右手は白壁の土蔵が幾棟も並んでゐた、右側は小砂利を敷き詰めた廣い空地だつた。その空地に酒を造る六尺桶が幾つも並んで轉がつてゐた。土蔵の白壁に沿うて、綺麗なコスモスがヒヨロ／＼吹き亂れてゐた。秋の蜻蛉が花の上を飛んだり、桶にとまつたり、もつと多く空を飛んでゐた。柴折戸をあけて内庭に入り、飛石を傳はつた。彼は縁側の上に帽子を投げた。通りがかりの下女が其處に手をついたのだ。

「ゐるか？ お母さん。」

「はそ。」

彼は上につつていきなり薄暗い佛間に這入つて坐つた。

「何か用事か？」眉をそり落し齒を黒く染めてる痩せた母親が佛間に這入つて來た。

「え、お母さん、僕少し金が要るんです。」

「ウム。」

「少しつてさう少しでもないが、實は義理が悪いんですよ、僕返さなくちやいけないんです。」

「いゝから、そんな高い聲をおしでないよ、で、どの位なんだ？」

「五百圓ばかりですが、どうにかありませんか？」彼は聲が高いのは初めから承知だつた、母から云はれると却つて低い聲なんか出し度くなかつた。

「……二三日待つておいで、兄さんやお父さんに云ふんぢやないよ、いゝかい。何とかして上げる、何故そんな不義理なものなんか作つたんだい？」

「だつてお母さん。」

「ウム、いゝ／＼、まあ、今日は兄さんやお父さんにも顔を見せて、夕飯でも食べておいで、心配しないで……用はそれ丈けかい、今一寸手が放せないんだよ。」母はそゝくさと、彼と二人で



その部屋で話してゐるのが人が見つかると思ひかゝるやうに立ち去つた。

傳三はわざと大風にあぐらをかいて、頬をブンと膨らました。十分も二十分もさうしてゐた。然し誰も部屋に入つて来る人もなかつた。彼は立ち上つて縁側に出た。誰も見てゐるものはない。大きな家は秋の日に森閑としてゐた。彼は帽子を掴み取つて片手にかぶせてクル／＼二三度廻した。それから急に下駄を突つけて庭に降り、柴折戸を抜け出た。土蔵の側のコスモスの花の下で、近所に嫁に行つた彼の姉の女の子とその友達が三人、コスモスの花びらを千切つて飯事をしてゐた。彼はそれを後から覗き、次に手を出して悪戯をした。

「あらッ、叔父さん！ 随分だわ、よくつてよ。」と女の子から睨められた。彼はあやまつた。その代り子供達の鬼ごつこの仲間になつてやつた。ゴロ／＼轉がつてる桶の間を駈け廻つて巫山戯た、然し三十分も遊ばないうちに彼は疲れて、轉んでる桶の中にゴロリと寝た、子供等が何を云つても口をきかなかつた。到頭子供等はブツ／＼言ひ乍ら其處を引き上げる頃、彼もプイと立ち上つて裏木戸から外に出た。

彼は眞直ぐ別荘にかへつた。だが上に上がらずに庭に廻つた。その庭にも温かい小春日和の日

が射してゐた。人の足音に木の間の蜂は眠りから醒めてブン／＼飛びたつた。菊の花の匂ひがした。土の上では冬の用意に忙がしい蟻が最後の活動をしてゐた。彼は其處に踏んで、蟻に戯れた。(お、蟻よ、蟻よ、蟻の子よ、俺は、人の子はこんなに淋しいのだ、こんなに悲しいのだ) 彼はいつ迄も蟻を見てゐた。

## 二十六

次の朝も傳三は遅く起きた。

矢張りソオファの上で煙草を喫つてゐた。だが今朝の彼は一層頭が混亂してゐた。(あゝあ、来るぞ、来るぞ、彼奴が来るぞ、今朝顔を洗ふ時チラと見た彼奴の許しを乞ふやうな眼はどうだ！ 恐しい、恐ろしい、あんな奴は兎角本物になつて来るから、あゝあ) 彼は煙草を投げ捨て、細かい髪の毛を搔き上げ、身體をソオファの上で二度揺すつて見た。(到頭來やがつた!) 彼は新聞を讀んでる振りをした。

清やが矢張り白い縁に襷を取つたエプロンをして珈琲道具を載せた銀盆を運んで来た。圓卓子の上に置いた、思はずガチャツと音をさせたので彼女の顔は一層赤くなつた。そして若主人の顔を見なかつた。彼女は毎朝のやうに其處で、「お早う御座います。」と丁寧に頭を下げなかつた。白いエプロンを片手にすると急いで駆け出すやうに逃げて行つた。

(畜生！でも矢張り彼奴あのエプロンをしてやがつたな、矢張り嬉しかつたんだな) 彼は思はず肩をすくめなくなつた。口にまとまりがなくなつたのを感じた。(これだ、俺は直ぐこれだ！) それを自分で氣がついて、自分に腹を立てた。

昨夜急に今迄唯の召使ひだつた清やが女に見えたのだ。彼は今迄それに氣づかなかつた自分に驚いたのであつた。昨夜彼が家へ戻つて来たのは十時、或はそれより遅かつた。彼はイラ／＼してゐた。何かしら滿津緒と氣拙い思ひをして来たのだ、滅茶苦茶に罵り合つた、散々心持ちをチラされた、だが自分が何を罵り、何がぢれつたかつたのか殆んど纏まつては頭に浮ばなかつた。唯、素的に口中が熱く、頭がガン／＼するやうだつた。で、家へ戻つたのだ。

「清や、白湯だ、白湯だ！」と叫んで、ソオファにどつかり腰を下ろした。清やはコップと藥罐を

運んで来た。「いや、水がいい、冷たい水！」彼は女の顔も碌に見なかつた。間もなく清やは水を汲んだコップを盆にのせて捧げて来た。彼はその時女の顔をみた。日本髪に結つてる、淺い小麦色のスベ／＼した頬は、ポツと赤く上氣してゐた、薄く白粉さへ塗つてゐる、彼女は湯上りなのだ。白いエプロンが瘦せてる彼女をしをらしく優しく見せた。彼は片手を出してコップを受け取つた。女は飲み乾すのを待つて立つてゐた。ブンと湯上りの女の匂ひが鼻を打つたのであつた。どうかすると前髪が右に傾くのをよく氣にして直す清やの可愛らしい細くはあるが娘らしくふつくりした手の働きを彼は急に思ひ出した。彼は何かもつと彼女を引き止めたい誘惑にかゝつた。

「清や、なんか甘いものがあるか？ お菓子だ。」

「はい。」彼女は急ぎ去つた。

(何と云ふしをらしい奴だ。あのエプロンはどうだ。何故今迄少しも氣がつかなかつたのかな) 彼の胸は動悸して来たのであつた。

再び清やは菓子皿を運んで来た。

「な、清やお前もおあがりよ。」

清やは若主人の突然の言葉に吃驚した。次に身體をモジ／＼させた。

「いゝんだよ、遠慮しなくもいゝ……まあお掛けよ。」彼は、全くどうしていゝか分らない清やの肩に手をかけて、無理にソオファに腰をかせさせた。

「ね、ね、驚かなくともいゝ、清や、お前その白いエプロンを掛けてると素的に似合ふよ。」

彼女は耳迄眞赤にして下を見た。彼は益々今迄この女に気がつかなくかつた自分を驚いた。彼女のおどけない茶色の眼玉まで思ひ出した。赤い耳朶も、細い頸も皆急に可愛くなつた。

「恥かしがらなくともいゝ、眞個なんだ。眞個に可愛い、可愛いんだ！」此の最後の言葉を云ふと彼は急に勇氣が出た。

「ね、清や、僕はお前が可愛くて堪らないんだよ、ね、ね。」彼はいきなり燃えるやうに熱い清やの顔を自分の腕の中に掻き込んだ。

「あれ／＼、若旦那様、若旦那様。」彼女は低く強く云つて身を藻掻いた。

「いゝ／＼、騒いぢやいけな、清や、清や……」

だが、清やは強く藻掻いて立ち上りさうになつた。彼は逃げられてはと狼狽して、腕を放した

のであつた。

「清や、僕は何も悪い事はしないよ、ね、ね。」女の耳元に囁いた。

「許してお呉れ。」彼は又腕に抱いた。

「若旦那様、私済みません、済みません。」彼女は顔を上げなかつた。

「えッ！何が済まないの？」彼は一層強く掻き抱いて、彼女の髪の毛の匂ひを強く嗅ぎ、それから耳に送つた。

「あの方にです、だつて若旦那様にはちやんと立派な方があるぢやありませんか。」

「なんだ、あんな女、あれは唯のお友達だよ、ね。」

「だつて、だつて……」彼女は急に泣き出した。彼は赤インキにでも觸れたやうに彼女を放して了つた。(畜生！何をくだらない事を云つてやがるんだ！)放されて彼女は立ち上つた、然し動かすに白いエプロンを顔に當て、泣いた。その姿を見て、傳三は急に胸がひきしめらるゝやうに彼女がいぢらしくなつて來たのであつた。彼も立ち上つて優しく寄つた。

「ね、ね、僕が悪かつた。泣くんぢやない、ね、泣かないで。」彼は優しく彼女の肩に手を廻して

顔を下げ、下から覗き込むやうに云つた。「ね、ね、もう泣かないで。僕には決して悪い気はないんだ、だつてお前が可愛いんだよ、ね、可愛いんだよ。」彼は又ムラ／＼起る可愛さの衝動に動かされた。彼女の眼に當てゝる左手を右手にとつて引き放し、彼女の顔を左腕に挟んだ、そして眼蓋に熱い唇を幾度も幾度も押し當てた。

「さア、もうお休み。」彼はその姿勢を崩さず障子の傍迄にじり寄り、そして最後のキスを落して彼女を放してやつた。(どうだ、俺は決して悪い人間ぢやない、これが引き上げ時だ!) さう自分に云つて彼は非常に満足した。然し清やが去つて一人になると、急に惜しくなつた。總ての不成功が癢に觸つた。(でも今夜はあれでいゝや) 彼は唇の感觸を回想し乍ら、長い間ソファの上で動かなくなつた。夜が更けて寒くなるのに氣がついた。(馬鹿! なんだつて民子さんの事なんか云ひやがるんだ!) 彼は急いで隣りの寢室に入つた。寢床はちやんと敷かれてあつた。……

今、彼は珈琲をゆつくり飲み終つた。そして今度は眞實に新聞に眼を通した。誰かの足音が向うでした。清やではない、婆やでもないかも知れぬ、然し清や以外の足音には彼は全く無關心で新聞を読み續けた。障子があいた。彼は振り向きもしなかつた。

「傳三!」静かではあるがせき込んでる母の聲に彼は吃驚した。

「おゝお母さん、どうしてお出でになつたんです?」彼は立ち上つて椅子をすゝめた

「お前、どうしてつてあるかい? 昨日のは持つて來たよ。」もう六十に近い彼女はソワ／＼せき込んで立つてゐた。

「あツ、お母さん、有難うございます。」

「何處に置くね。」彼女は紙幣の束を出した。何處かへ藏つて了ひたさうだつた。

「其處に置いて下さい。いゝです。」彼はその束に觸れたくも見度くもなかつた。

「お前、そんな不義理なものは成るべく早く、今日の中に返して了ひなさい。お父さんや兄さんには内證にしてあるんだよ。それから茲に五十圓、これもお母さんから上げる小遣だよ。」

「え、えゝ。」

「お前分つたかい?」

「分りました。承知しました。」

「ぢや私はこれでかへるからね、お前何故昨日黙つてかへつたんだい。も少し家へも寄りついた

方がいよよ。」

「え。でもお母さん、もうかへるんですか？」

「ウム。一寸、墓参りに行くつて家を出て来たんだからね、尤も大急ぎに行つては来たんだが。」

「もう墓参りに行つてらしつたんですか？」

「お前ぢやあるまいし、今何時だと思つてるんだね。」彼女は腰も落ちつけず去らうとした。「藏つて置きよ、いよかい、分つたね。」

「ええ。」彼は母の去るのをその儘にして、紙幣束を卓子の抽斗に抛り込んだ、それから玄關に出た。母は婆やの部屋から出て来て、婆やと清やと傳三に送られて、そよくさと玄關を出て行つた。彼は今チラと見た母の小さな丸髻を眼に浮べ乍ら、不機嫌な顔をし乍ら部屋に戻つた。

「お母さんはあれだから駄目なんだ！ 何故俺をもつとピリツと叱つて呉れないんだ！」彼は何か取つて投げたい気持ちで部屋の中を歩いた。「駄目だ、駄目だ！ 何故あんなに甘やかすんだ。何故あんなに年中ピク／＼して暮してるんだ！」彼は多くの偉い人々の傳記でよんだ立派な母親を思ひ出した。彼は卓子の上の書物を取つて疊にたゞきつけた。次にソオファに身を投げた。紙

幣束が机の外からも透いて見えるやうな気がした。彼は急いで眼を卓子から天井に移して、仰向になつた。

「あの、御飯の用意が出来ましたが。」清やの恐る恐る云ふ、はつきり口から言葉が出ない聲を聞いた。

「後だ、後だ！ 飯なんか食べない！」

彼は全く憂鬱になつてゐた。

午後遅くなつても彼の憂鬱はとれなかつた。夕方近く彼は紙幣束を手早く風呂敷に包んでパイと外に出た。

俊一は夕食の支度するのに、立つたまゝで七輪に火を熾してゐた。傳三は縁側の前に立つた。

「御飯の用意か？」傳三は奥でバサ／＼團扇を動かしてゐる俊一を呼んだ。

「やア失敬！ 御飯はまだだらう、君も一緒に食はないか？ 何もないが。」

「ウム、御馳走になる。」傳三は部屋に上つて机の傍に胡座した。

俊一は米を多くして、鍋を火の上にかけた。

「此の間は失敬！ すつかり用意して了ふから待つて呉れ。」  
 「ウム、俺も手傳はうか？」さう云つたが、傳三は動く様子はなかつた。机の上の書物を手に執つた。

俊一は飯を炊き、芋を澤山入れた味噌汁を造つた。住職から茶碗類を借りて来て、机の上に二人前並べた。ランプをつけた下で飯を食ふ間も他の話をして、傳三は金の事は云はなかつた。俊一もまさか其の時持つて来てるとは思つてなかつた。

「茶をいれようか。」さう云つて俊一は立ち上つた。「これからだん／＼寒くなると茶が欲しくなるな。」

彼は大掴みに安い茶を土瓶にたゞき込んだ。

「ね、俊ちゃん。」傳三は熱い茶を吹いて、下に置いてから顔を赤くした。「僕持つて来たんだ、この間の約束のものを。」

「えッ、もうか？ そんなに早く持つて来て呉れたのか？」

「ウム。茲にあるよ。ね、丁度になるやうに五百圓持つて来た。」

「五百圓？ 僕はそんなに要らない、四百圓で十分なんだ。」

「いゝんだよ、何でもないんだ。取つてゝ呉れ、君は働いたりしないでもつと勉強した方がいゝよ。兎に角暫く考へた方がいゝ、働く前に。」

「ウム／＼、有難う、でも五百圓は多い、僕はなか／＼返せないのは分つてるから。」

「そんな事、駄目だ、俊ちゃん、何でもないんだから取つて置き給へ、何かの役に立てば僕は嬉しいんだ。」

「……さうか……有難う。」俊一は頸を垂れて了つた。

「茲に置くよ。」傳三は風呂敷を開いて、紙幣束を机の下から少し押しやつた。二人は束を見ようともしなかつた。

「有難う……僕は働く、それが眞實だ。だがその前に僕はしなければならぬ事があるんだ。」

「しなければならぬ？」傳三は反語的に繰り返したが、ハツと気がついて黙つて了つた。彼は相手のその點に觸れるのを非常に恐れたのであつた。

「ウム、どうしても解決せねばならないんだ！」俊一はまだ頸を垂れてゐた。

「さうか……」殆んど口の中で云つた。だが氣を取り換へた。「ね、兎に角一日も早くあんな學校を止した方が清々するよ。」

「ウム。」

傳三は金を渡して役目が終つたやうに安心した。彼は友の姿を見てゐるのに忍びなくなつた。

「僕は又來る、ね、ゆつくり考へた方がいゝ、決してあせらずに。」

「もうかへるのか？」

「ウム。僕は今日は初めから直ぐかへる積りで出て來たんだ。」

「さうか。どうも有難う。わざ／＼持つて來て貰つて、僕は君に對して濟まない。」

「いゝんだ／＼、ぢや失敬するよ。」

「ウム、有難う。」

「その儘にして給へ」傳三は急いで縁側を降り、闇に吸はれるやうにかくれた。

俊一は紙幣束を膝にのせてもう一度頸を垂れた、彼は彼の胸の中の神に感謝したのであつた。

暫くしてから氣がついて、本箱の抽斗に入れ、堅く鍵をかけ、食後の跡形づけをし始めた。彼は

その夜はスワルツに彼の信念と決心を手紙に書かうと決心した。

傳三は市街の燈火を見乍ら靜かに坂を下つてゐた。(何と云ふ氣の毒な男だらう、俊ちゃんは眞個に立派な心情を持つてるんだ。しなければならぬ事があるとは此の間の夜も度々云つてゐた。

俺はうつかり聞いてゐた。あの男の理性では、外的にもさうだがあの精神的の潔癖ではどうしても母を許し又妥協する事が出來ないんだ、然しあの男は到底他の人に見られないやうな美しい温かいそして烈しい心情を持つてゐる、あの先刻のあの顔はどうだ！眞實に苦んでる人間だ！……)

(それにひきかへ此の俺はどうだ！欺かなくともいゝ母を欺いた、又俺はその場のイージーな態度を取つたんだ、嘘だ、何もかも嘘ばかりだ！あゝあ、あゝあ)彼は別荘に急ぎ歸つた。今こそ彼は青白い顔色をし、身體を木の葉のやうに顫はして部屋の眞中に立つて了つた。(おゝおゝ俺の有様はどうだ！こんな生活を續けてゐては、この俺が滅茶苦茶になつて了ふ！何たる有様だ！あの満津緒は悪魔だ、あの女がなんだ、一體何處が新しいんだ、何の内容があるんだ。何の藝術が分つてるんだ！あの女にシヨオパンもく、そもあるもんか！畜生、俺は今日迄何をしてた！あの女が新しい、話せる、おゝおゝ、何と云ふ醜體だ！星と堇が少し變形したやう

なものだ。二人で、「ベレアスとメリサンダ」の白をやつて見たところでなんだ！ 塔にさす青白い月がなんだ、金の髪をすいて歌を歌つてみたところで何があるのだらう！ 畜生、よくもよくも。要するに肉だ、野獣のやうな肉の慾しか何もない。あゝあゝ、今日迄俺は何をしてだらう！ さうだ、俺は此の地を去る、永久に去る、俺は俺の生活をせねばならないんだ！

「清や！ 清や！」

「僕の鞆、旅行鞆の大きい方を出せ！ それから……」

清やは全くオロ／＼して、若主人の指圖通り鞆を出し、着物を出し、旅行道具を出した。

「先づ第一に、さうだ、清や、俵屋へ行つて来て呉れ！ 今夜の十時、海岸線の上り急行！ ウム／＼、さうだ！ 早く！」

清やは傳三が斯うしていきなり旅に出るのは珍らしくはないのだが、今は總て自分の咎でもあるかのやうに泣き出す許りに狼狽しきつてゐた。彼女は両手の間にエプロンの端を皺苦茶にもみ乍ら息を切らして俵屋からかへつて來た。そして傳三の云ふ通り大きな鞆に着物でもシャツでも、書物でも身の廻りの道具でも一生懸命詰め込んだ、彼女は自分で何をしてるのか分らなかつ

た。唯後から叱られ、せき立てられるやうに許り思つた。傳三は洋服に着換へるとソオフアに腰を下ろし一つ處を見詰め、清やが細かく問ふのに、「ウムさうだ。」許り繰り返して、何もかも鞆に詰め込ませた。

「婆や、行つて来る、お母さんには決して何も心配はないと云つて呉れ、清やも行つて来る。」彼は俵に乗つた。彼は清やが涙を浮べてゐたのは知らなかつた。

彼は上りの急行の三等車に乗つてゐた。汽車は全速力で走つてゐるのだ。(あゝさうだ、俺は清やにお詫びをして來るのだつた。だが民子さんは?)

## 二十七

傳三は東京を通り過ぎて伊豆の温泉地に來てゐた。彼は既にその地に二夜過ごし三晩目の夕暮になつた。彼は淋しかつた。温泉地は山と山とに挟まれ眞中を溪流が流れ、その岸に人家が並んでゐた。星は雲の間から唯一つ光つてゐた。もう十一月である、宵の川音はサラ／＼身に沁むや



うに寒かつた。彼は宿を出て當もなく身を縮め乍ら歩いた。或る家からは絃の音につれて歌の聲が洩れてゐた。ほのかな燈火が泣き出しさうに光つてゐた。傳三は通りがかりの灯影に吸はれるやうにフラ／＼這入つて行つた。障子からさすあかりに庭石が光つた。建物は森閑としてゐた。

「あの、お酒に致しませうか、おビールに？」白粉を塗つた女が手をついた。

「お酒、お酒！」

殺風景な座敷だつた。小さな牛鍋屋に過ぎなかつたのだ。彼はちやぶ臺の上に兩肘をついて眉をひそめてゐた。

火が這入り、酒を二三杯注がれると、彼は温かくなつた。然し彼の心は此の家に這入る時からゆるんでゐたのであつた。彼はそれは好奇心にすぎないと思つたのであつたが、今は女の香が彼を襲つた。二十三四と思はれる女は電燈の下で笑つて見せた。

「御冗談お止しなさいよ、これでもう、ちは堅いんですよ。」さう云つても女は笑つて彼の肩を打つた。「ね、此の間もいゝ年をした人がお札を置いて頭を下げるんぢやありませんか、妾は斯う云つてやつたのよ。『みつともないぢやありませんか、男が、子供が二三人あるやうな顔をしてさ、女

の前に頭なんか下げるなんかつて。』」

「ウム、全くだ、全くだ。俺が馬鹿さ。」

「でも、貴方のやうにさつぱりしてる方はわたし大好きよ。……でも貴方はどつか身體がお悪いんでせう？」

「どうして？」

「わたし昨日通りで貴方を見掛けてね、まあ此の人も若い身そらで弱いんだよ、とさう思つたのよ、ね！」

「ウム、よく分つたね、少し心臓が悪いんだ。」

「さうでせう、妾も何でもさうだらうと思つたわ、屹度心臓だらうと思つたの、分りますわ。妾なんかもこれで弱いんですよ、まあ半分湯治の積りでこんな處に奉公はしていますが。」

女は變な咽喉にかすれる聲を出し乍ら、次第に憐れつぽく身の上話を始めた。そして袖の端で涙を拭きさへした。

「……ぐちつぽいわね、厭になつたでせう？でも何だか貴方には話しても聞いて貰へると思つ

たのよ、ね……」

酔つてゐる傳三も、涙を流しさうにして聞いてやつた。そして堅く手を握つてから彼は外に出た。(あゝあ)夜は可なり更けてゐるやうだつた。

彼は宿にかへつた。そして机の前に永い間坐つてゐた。いよく民子に手紙を書かうと決心したのであつた。彼は書いた、だが二十行も書くとペンが止つた。餘り感慨めいた長たらしい書き出しだと思つて紙を圓めた。又書いた、だが又ペンは進まなくなつた。紙をもんで口で嚙んだ。三度目に思ひ切つて要件ばかり書いた。

「私は決心して東京に出て参りました。決して永久とは云へませんが當分東京に居て勉強する積りです、仙臺とは一切の關係を斷ち度いと思つてます。私はあなたのお示し下されし友情と愛情に深く感謝いたします。私はあなたの愛情は否お心は了解出来ます、だが私はそれを受け容れる事が出来ません、わざと受け容れないのはありません、私そのものがそれ程弱いのです。私はお氣の毒に存じます。これであなたとは全然關係を斷ちます、だがそれによりあなたを傷つけ、又私自身を傷つけ度くありません。つまり、此の最後は全然二人の性格の相違から來てゐるのを

御了解ください。その他は、今私は何事も申上げません。くれぐれもあなたのお心に感謝いたします。

仙臺と關係を斷つ事に依り、小畑君へも當分は通信をいたしません。だからあなたから小畑君に此の手紙を見せて下さい。小畑君は自分を保ち得る人です。あなたは決して絶望したりする方とは思ひませんが、お心に餘る事がある時はあの私の友人に御相談下さい。信じていゝ人です。私は最後のあなたに對する友情としてこれだけ申し上げます。あなたはこれからの日本の女性として謙遜なる自己を保ち樹てゝ行けるひとになれるのを私は信じて居ります。あなたの優しい美しい心を最もよく生かして下さい。人の最も恐るべきものは自分自身の中にあります。では、さよなら。」

書き終ると彼は急いで蒲團を被つた。次の朝早く彼はその地を出發して東京に來た。先づ最初に上野驛に駆けつけて午後の急行に手紙を乗せようと思つた。その次の日は土曜日なのを彼は胸の中で計算した。上野驛で彼は大急ぎに民子のゐる寄宿の舍監に次のやうなはがきを書いた。舍監は未亡人で傳三のよく知つてる女だつた。

「前略、別通松村民子氏に宛て書面差し出し候 松村氏は小生の友人にて要用之れあり候ま書面認め候 松村氏及び小生を信用下され書面はその儘同氏にお渡し下され度く暮々もお願申上げ候 敬具。」

彼は郵便を出し、それから谷中にゐる友人の宿に赴いた。彼は其處に下宿さして貰ふつもりだつた。

## 二十八

俊一はその朝スワルツから手紙を受け取つた。「あなたの疑惑に對し、私は衷心から悲しく思ひ又氣の毒に存じます、尙ほ精しくは来る月曜午後二時四十分神學部の私の部屋で御面談したいと存じます。マタイ傳二十六章四十一節をお読み下さい。」彼は、スワルツから彼の心を眞に了解されないのを悲んだ。實に立派な人ではあるがその思想のオルツドツクスなのを悲んだ。彼は指定された聖句を想つた。基督がゲツセマネの園に祈つた所だ、「我心いたく憂へて死ぬるばかりな

り。」と云つた基督を想つた。「惑に入らぬやう目を醒しかつ祈れ、その靈には願ふなれど肉體よわきなり。」その通りなのである。

(基督は眞に人である、一個の人なのだ。人なればこそその悩みは尊い。神の子で、神と神の子と聖靈とは三體にして一體であると云ふ、そんな事があり得るか。おゝあの血の汗を流して夜更けのゲツセマネに祈つた人なる基督、その靈の悩みこそ尊い)

彼は晝が過ぎても前庭に降りて、躡んで枯れた草の葉を引つ張り乍ら何かを考へてゐた。

「御免下さい。」後ろで、女の静かな聲がした。彼は驚いて立ち上つた。其處に袴をはいた民子が立つてゐたのであつた。彼はその顔を見た時思はず丁寧に頭を下げ、禮をした。民子も何故か胸を打たれたやうに禮をした。

「どうぞ。」彼は先に立つて、彼女を部屋に招じ入れた。彼は一枚切りない座蒲團を押しやつて机の前に坐つた。彼は頸を垂れてゐた。民子も座蒲團の上には坐らなかつた。

「突然お邪魔いたしました。」

「いゝえ。」彼は顔を上げた。

「御迷惑ぢやないでせうか？」

「少しも。」

「實は今朝あの方からお手紙を頂いたのですが、小畑さんはあの方が東京へお出でになつたのは御存じなんで御座いませうか？」

「萩原君がですか？ いゝえ少しも知りません。いつ東京へ行つたのです？」

「さあ、私にもその日は分らないのですが、今朝手紙が参つたのです、私自身も非常に驚きました。實は、今日はあの方のお宅へ伺ふ積りで居つたので御座いますが、突然舎監から手紙を渡されたのです。その瞬間も随分驚きましたが、私は手紙をよみました……」

「どうしたんです？ それで？」彼は彼女の黒い髪を見た。

「どう云ふわけか、小畑さんにも手紙を御覽に入れるようにと書いてありますから、茲に持つて参りました。」

「さうですか、見ていゝですか？」

「えゝ、どうぞ読んで下さい。」

俊一は手紙を読んで黙り込んで了つた。民子も先刻から下を見てゐた。

「……私は動かされない断案を下されたのですわ。」彼女は殆んど口の中で云つた。

「そんな事を云つちやいけません！ あなたは心の底からさう思ひますか？」

「……………」

「眞實にさう思ふんですか？」

「私が悪う御座いました。お許し下さい、何だか私今あなたの前で無暗にあの方に反抗したくなつたのです、どうぞお許し下さい。私はまだ甘えてゐたのです。」

「あの男は餘つ程苦んでるのです、だが手紙で斯う云つたからつて、あの男はあなたを忘れられる筈がありません。あなただつてさうでせう？」

「え、眞實申しますと私はその手紙をよむと直ぐ東京へ行き度くなりました。」

「一體交際を断つとか反對に將來を約束するとか言葉に出したり文字にしたりして誓ふべきものでせうか？ 『誓ふ勿れ』と云ふ言葉を僕は随分考へます。誓ふ法が唯一つあります、黙つて心の中で誓ふんです、だが私自身斯う感じて、自分の心で誓つたものは誰も見もしないし聞きも

しないと思つて、そつと都合の悪い時は取り消し度くなります、私はこれが一番怖しいと思ひます。その度に自信がなくなりますから。」

「……………」彼女は自分を忘れて驚きの眼を見張つて相手を見詰めてゐた。

「行きなさい！ あなたはあなたの心の通りに進みなさい！ 何も今學校を止して行けとは云ひません。僕はそれしか云はれません。あの男が決心して東京へ出たと云ふのは所謂「危険」から逃れるためだらうと思ひます。確かにあなたに關係してではありません。餘程決心したに相違ありません。却つてあなたのためには喜ぶべき事ではないかと僕は考へますが、あの男はこれ程あなたを信じて居ります。」

「え、さうです。だが二人の性格の相違から來るとあの方は云はれます。」

「それはあなたも御承知ちやありませんか。今あの男は素的に失望してます。だが性格はそんなに宿命的なものでせうか、何よりもあなたのお心に従ふのが大切でせう。」

「え、私はあの方を愛して居ります、なんだかあの方が私自身の靈魂たましひのやうに私の胸に寫ります、それをヂツと見詰めてゐると、私は何とも云へなく悲しくなつて來るのです、苦しくさへなりま

す、何故でせう？ 愛と云ふものは悲しみなのでせうか？」

「さうかも知れませんが、でもあなたはそれなしには生きてゐられません、さうでせう？」

「え、さうなのです、眞個にさうなのです。」彼女は顔を眞直ぐに上げて前方を、彼女のいつも遠くを見てゐるやうな眼で、ヂツと見詰めてゐた。それに射られたやうに彼は眼を伏せた。

「……………あなたは幸福な方だと僕は思ひます。お進みなさい、そして行つておやんなさい。」

「え、私は當分手紙を出さない積りですが、何故と云つて返事を頂けない手紙を出すのは苦しいです。此の手紙が何故含監から一言も詰問されないで渡されたか不思議なのです、——ですが來月の末になれば冬休みになりますから私も東京に參ります。でもあの方は東京の何處にゐなさるのでせう？」

「それは多分あの男は當分私にも黙つてませうが、僕等の一級上だつた加藤と云ふ男、あなたも御存じでせう、今ある大學へ行つてますが、あの男に訊けば分ります、親切ないゝ人です。手紙もあの男氣付でやれば屹度萩原君の手に渡ります。」俊一はペンを執つて、加藤と云ふ男の住所を書いて彼女に渡した。

彼女は丁寧に禮を云つてから辭して去らうとした。

「僕も、途中迄行つて上げませう。」彼はムツツリ黙つて彼女と並んで歩いた。橋の袂に來た。もう一度民子は禮を云つて別れた。

俊一は一人で坂道を登つてゐた。何故とも知らぬ淋しさが彼を圍んで來た、その淋しい自分の姿を、二三步離れて自分で眺められるやうだつた。(あの女は何と云ふ幸福な心を持つてゐるのだから……この俺にはいつ眞に安らかな心が得られるのだから)彼は崖端で手に觸れた枯れた小枝を千切つた。全く無意識でその枝をギザ／＼に健康な白い齒で噛んだ。

民子は橋を渡り屋敷町を少し歩き、次に理科大學の門をくゞり、森閑として廣い樹木の多い構内を通り抜けようとした。櫻の枯葉は落ち盡してゐた。(……あの小畑さんは私を幸福だと云ふ、何故だらう? でもあの方は傍にゐるのが恐しいやうな人だ、だが私の心は眞個にあの人の前に出ると安らかになる、何もかも云へ度くなつて了ふ、嘘が云はれない、クヨ／＼悲しくて堪らなかつたのが、何故あの人の前に出ると自分の悲みなんか何でもないやうになるのだらう? だが

あの人御自身は何と云ふ淋しさうな顔をしてるのでせう! 眞個に心の底から苦んでなさるやうだ、何を苦んでなさるのだらう? 私は我儘ばかり云つて、あの人のために此の私がかの役に立つて上げられる機会があるかしら、ほんの何かの役に立つて上げる時が……おゝそれにしてもある萩原さん、何と云ふいたはしい方だらう、今東京で何をしてなさるだらう? おゝ直ぐにも此の私が行つて、思ひ存分抱かれて、その涙を拭つて上げたい、おゝお、私達二人はどうなるのでせう? 此の私達の將來はどうなるのだらう、あの方は何と云ふ優しい心を持つてなさるか、妾は行く、小畑さんから云はれた通り妾は行く、行くのだわ、あゝ行つて上げますわ……)彼女は體を眞直ぐにして靜かな木の下道を歩いてゐた。傳三が彼女自身の靈魂のやうに胸に寫つて來た、それを胸の中で豎く搔き抱いた。だが、悲しさは全身に擴がつて襲うて來た。(性格の相違だと云ふ、あゝ私達はどうなるのだらう?) 彼女は二人の身の上が憐れで堪らなくなつた、そして何よりも彼女自身がしみ／＼と憐れになつて來た。(おゝおゝ、何と云ふ不幸な私だらう……) 彼女は體を伸ばして歩き乍ら、涙の衝動は胸に波打つやうに襲うて來た。歩き乍ら泣いた。熱い涙が眼の縁に浮び上つた。……

民子が俊一を最後に訪れた此の日の夜、傳三は東京での新しい生活の二夜目だつた。彼は第一夜も第二夜も酒場にあつた。谷中の彼の轉げ込んだ下宿にゐる友人は矢張り繪の稽古をしてゐた。彼と中學も違ひ年齢も彼より二つ三つ上だが古くから馴染の男だつた。その男は恐しく頑丈な體格と緒ら顔をして、年中着てる黒いキヤラコの露西亞式のシャツの上に坐つてる頸は太くてそして長かつた。髪の毛は眞黒でバリ／＼で縮れてゐた。口も大きく鼻も大きい、だが笑ふと、子供のやうな顔になり、眼がまるでないやうに細くなつた。彼はよく笑つた、煙草で黒くなつた、然し元々健康な白い齒を出して大聲に笑つた。始終煙草をスパ／＼喫つてはベツ／＼と唾をした。ズボンのポケットの中で銅貨をちやら／＼させてゐる時は頗る上機嫌だが、酒を飲むと却つて沈み込むことが多い。彼はカツフェーやレストランはブルジョアの行く處だと主張するのだ、それから彼は傳三と暗い上野の山を越え汚ない薄暗い通りを歩いて、淺草の酒場、而もほんの労働者が寄る酒場に這入つた。此の「露西亞シャツ」は先の尖んがつかつた黒帽子を被つてゐた。二人は向き合つてブランデーを飲んだ、汚ない卓子に肘を張り出し、盛んに飲んだのだ。

「どうだい、彼奴の尖んがり帽子は、いやに尖んがつてやがるな、やい、其處の尖んがり帽子！」向うで酔つてる労働者の聲がした、その聲がキン／＼して氣に入らなかつたので「露西亞シャツ」は怒り出して了つた。

「何云つてやがるんだ、文句があるけえ、さあ來やがれえ！」彼は仁王のやうに立つた、彼は自分の體格の優秀を感じた。で益々猛り立たうとした。

「君、止せ、止せ。」酔が廻り始めてゐた傳三は中に立つて本氣になつて止めた。「詰まらねえ、止せよ。」

酒場の主人も口をきいて、少しゴタ／＼したが結局をさまつた。他の飲み客達は喧嘩が本物になつても困るが、斯うしておぢやんになれば名残り惜しかつた。

「よしッ！ 俺は飲むぞ、その代り飲むぞ！ さあ注げ！ おい傳ちゃん、飲めやい、俺は彼奴等の味方なんだ、俺は労働者の味方なんだ、それを彼奴等は知りやがらねえ、おい傳ちゃん、もつと飲め！」彼はコップで卓子をたゞきつけた。

「ウム、飲む飲む。」傳三はすっかり酔が廻つた。

「飲め！」

「飲む。」

「もつとだ！」

「飲むとも、畜生！ アブサンでも何でも持つて來やがれえ、ウム、俺は飲むんだ。」（あゝ飲む、飲む、うんと飲む、畜生！ 畜生！）煙草の煙に満ちた、酒のこぼれてる、人間の汗の臭に満ちた喧騒の中で、傳三は硝子製の眼を潤まして光らした。

「飲め！ 畜生、俺は飲むぞ！」（飲め飲め、何もかも飲み盡せ！ 畜生、畜生！）彼は笑つて泣いた。そして泣いて笑つた。一度後にグイと身をそらしてから、コップを掴んで安い色のついた酒を口に注ぎ込んだ。

二十九

古いヨーロッパの城のやうな重苦しい、苔と蔦が這つた神學校の薄暗い部屋、それは天井が高

いが窓の狭い、暗い灰色の壁の厚い、總ての器具が重々しくて古典的な部屋の中で、黒い皮張りの椅子に腰かけてスワルトと俊一は唯二人で先刻から話してゐた。ストーヴの火は消えかゝり、午後の方は薄暗いのである。空氣は冷たく動かない。その中で二人は興奮してゐた。だが、取り交はす會話は飽く迄静かだつた。安樂椅子の肘掛けの端に両手をキチンと置き、スワルトは小さなままとまつた顔を見えない位細かく顔はしてゐた。彼の顔には血が昇つてゐたのだ。

「私はお氣の毒に存じます。」俊一は相手の眼を見ないで云つた。彼は先刻から色々云つたが、要するに二人の結論が平行線のやうに合はないのを感じ切つてゐた。で、思ひきつて結論を明らかに述べ始めた。「貴方の仰しやる事は私には了解丈けは出來ます。自然の萬物が——人間も含まれて——或る大なる法則に依つて動いてゐる、さう私は考へる事は出來ます、幾分感じられもしません。だが我々人類の罪の贖ひのため、神は一人子を下さつた、それは基督である、私はさう信じることが出來ません、此の點を最も貴方が私に對し氣の毒にお思ひになるのも分ります、貴方の信念は其處に最も力點があるのも私は知りました。だが悲しい事に私はそれを信じられません、其處に私の苦痛があります、私は神が私の胸の中にあるとはつきり感じられるやうになつてます、



だが今の教會の信條に依つて一般の人に傳道する事が出来ません、先刻から種々の言葉で述べた事は要するに茲に歸します。私は貴方を尊敬する點では人後に落ちない積りです、又基督を神の子ではないが——面前で斯う云ふのを許して下さい——全き人として尊敬して下さる、彼の教そのものを常に忘れません、で私は常にそれを心に浮べて、これから私の道に進んで行く丈には信じて下さつていゝと思ひます。だから先刻からの私の希望を許して下さい。お願ひ致します。」

「分りました。私は貴方を此の上止むる事は出来ません、唯私は常に貴方のために祈り度いと思ひます……今お別れする前にも祈らして下さい。」

二人は頭を垂れた。スワルツは正しき道を求むる誠意ある此の青年のため、一日も早くその正しき道をはつきり見させ給へと云ふ意味の祈りをした。俊一は總ての束縛から逃れ出られた喜びと、その溫良な師に假令自分の信念でも、師に逆く考へを述べ終つた安心からホツとして、習慣通り頭を下げてゐても、師の祈りはびつたり胸に寫らなかつた。

二人は靜かに眞直ぐに立つた。手を堅く握り合つた時、自分より低い師の顔をチラと見ると急に胸がせまつて涙が迸り出さうになつた。彼は折々遊びに行く約束をし、借りた金は事務所から計算表を送らるゝ約束をして、重い樫の戸を押して暗い廊下に出た。自分で驚く程足音は森閑とした建物の中に響いた。彼は石段を下つて外に出た。もう一度振り返つて高い塔を見上げた。彼は彼の去つた後でスワルツが一人でゲツセマネの園に於ける基督のやうに祈つてゐる姿を感じた。その瞬間、人間は總て一人一人到底逃れ得ない苦惱の底に沈んでゐるやうに思はれた。彼は頭を垂れて人通りの少ない街を歩いてゐた。スワルツ夫人とケートの二人ともあの儘握手をせずにつた。傳三も去つて了つた。民子とももう會ふべき理由がない、あの人自身の道を踏めと云つてやつたのだ。彼は記憶のない父をどうしても心の中に擱む事が出来ないのだ。子供の頃から話にきいた父を總合して見るのだが、それは一個の人となつては呉れない。そして母！一旦振り放つ事に決心し努力した母の姿は、その努力した事に依つて一層彼を焦心させた。それは恰も彼の心の行きつき處がないやうなのだ。今、彼は全く一人ぼつちになつて了つた。彼は唯、彼の胸の中に生きるしかないのだ。それは淋しくも安らかである。だが全く安らかではない、隙間を洩るやうな冷たい風が、容赦なく心の中を覗いて行つた。だから彼は淋しさと悲しさに頭を垂れた。(俺は何をすればいゝのだらう？ 總ての人は俺から去つた。今は冬にならうとさへしてゐるのだ)

十一月の曇り日の今はもう黄昏が来るやうに思はれた、何處の家からか亞炭をたくブシ／＼と登る煙と噎せるやうな匂ひが漂つて來た。市街の雑音は重い空氣の下ではつきり地を這ふやうに傳はつた、それが却つて胸の悲みをそゝられるやうだつた。俊一の表情は石のやうになつた。

頭を垂れて山の家にかへつた俊一は机の前に、何物にも手も觸れず眼も觸れず正しく坐つた。彼の内から湧く温みが身體全部を温め切るか、それとも重い而も水のやうな空氣の冷たさが彼の内部の蕊の蕊までも冷やし切るか。彼は齒を喰ひ縛つてその二つの力の争闘を身じろぎもせずチツと自分で見詰めてゐた。

## 三十

今は感化院の子供等が彼の淋しさをまぎらせるためでなく、彼の内的生活にとつて無くてならぬもののやうになつた。それが何の理由であるか分らない。彼は子供等に交はつてゐる時にのみ安心があつた。讀書をしても、林の間を散歩しても、「隠れ家」に籠つて考へ込んでも、心の眞に

安まる折はなかつた。唯此の不良兒に交はつてゐる時丈け嬉しかつた。殊にあの齋藤は指一本觸れてやつても眼に涙の薄膜を張り、今迄動物だつたのが何ものにも増しておとなしく頸を垂れてなつて來た。温かい心と心が交はり合ふやうだつた。

朝はゾク／＼霜柱が立つた。それは殆んど見事と云つていゝ位美しかつた。俊一は朝井戸端に出た時、よく此の霜柱を拾ひ上げて掌にのせて、美しい霜の結晶に見入つた。それは朝の光線に當てると幾方面からも反射して、ある一角はキラ／＼と眼を射るやうに光つた。然し、間もなく解けて行つた。その冷たさがピン／＼手に沁み渡つた。彼は口から温かい息を吹きかけた。息は直ぐ白い水蒸氣に凝つた。雪の來る前の空氣は乾燥してゐた。雀の鳴き交はず聲がはつきり響いた。朝の日は條になつて縦の林を照らした。

感化院の柵に近づいた。子供等は前庭に朝の整列をしてゐた。これから顔を洗ふのだ。一番團體の大きい「丸太」が先頭に立つて薄笑ひしてゐる。齋藤は、尻尾の方でぼんやりやゝ下を見てゐる。板橋は薄ぼんやりで特に光のない顔をしてゐる。畑山は兵士のやうに緊張して氣取つてゐる。西田は手を舉げて叫びたさうに、笑つてからわざと生眞面目な顔を作つて見せる、兩手にハアハ

ア息をかける、彼はいつも陽氣だ。他の子供等は朝起きて先づ有りとあらゆる物を白眼でジロリと見る稽古をしてる、然し一様にどの子供の着物もブク／＼で、鼻と口から吐く息は白く、そして耳は眞赤に紫にかじかんでゐた。地上から雀が群れてブル／＼と羽根を顫はして飛び立つた。柵の上の白い霜は一面日に解けて光り、他面は白く残つてゐた。感化院の屋根も日の當る一面は霜が水滴になつて流れた。俊一は子供等が列中から眼で挨拶したのを見た。で彼は戻つて來た。途中しきりに頭を傾げた。それが遂に軟かい微笑を彼の顔に作つてしまつた。

その日の午後は薄日がさしてゐた。縦林の下闇は空氣が乾いてゐた。水々しい緑の匂ひではなく枯草の香がした。大きな鳥、姿は見えなかつたが多分雉が、草の下を音を立て、這つてからバク／＼と飛ばたきし乍ら飛び立つた。縦の油の匂ひは、春のやうに芳醇に身體に沁み渡つて細胞の一つ一つをピチリ／＼とはじけさせるやうではなく、爽やかに而も下へ下へと地に沁み入るやうに匂つた。幾度か花を開いた薔は、全く小さな最後のしなびた花を二つ三つつけてゐた。莖も筋ばつて曲りくねつた。

眼をあげて何物かをキヨロ／＼探してゐる齋藤の姿が、突然木の蔭から現はれた。手には吹矢

の筒を持つてゐた。彼の頭の毛はその後二三度は刈つたので、並に生え揃つてゐた。

「……………」俊一は彼の前に近寄つて立つた。

上ばかり見てゐた齋藤は吃驚して矢張り立ち止まつた。

「小畑さん、これ！」彼は常に似合なく元氣に、血を流してグツタリ死んでゐる小鳥を三羽懐から出した。

「お前が捕つたの？」

「ウム。うまくなりしたべ。小畑さんさ上げすべ。」

「いらぬ。……………坐れ。」

二人は黙つて草の上に坐つた。暫く無言だつた。

「……………ね、小畑さん、俺さ字を教へんか。」子供は祕密のポケットをガサ／＼手探りして、半紙と七分位の長さの鉛筆の端を出した。「ね、齋藤と本字でどう書くのツシヤ？」

「これお前が書いたのか？」

「ウム。」彼はほんの少し顔を赤くして下を見た。紙の端に、サイトウと捧切れを並べたやうな字

が書いてあつた。俊一は頭の圓い鉛筆で、膝の上で齋藤と丁寧に書いてやつた。

「ウム。斯う書くのずか、六ヶしいね……」

「お前の名前は何て云ふんだ？」

「齋藤。」

「名前よ、齋藤何つて云ふんだ？」

「ウム。シヨウズつて云ふの。」

「シヨウズ？ シヨウジだらう？」

お前に兄弟ツ子あつたのか？ おあんつあん(兄さ)があつた

のか？」

「ウムウ、そんなものがいん。」

「ちや多分斯う書くんだらう。」彼は正治と書き足してやつた。

「ウム。斯うかくのすか。ウム……ね。俺さ姉ツ子一人あつたのツしや。」

「さうか、今どうしてんのや？」

「なアに死んだのツしや。身體が火のやうに熱くなりしたが、手ツ子だの足ツ子だのピクラ〜

動かして死にした。丁度この鳥ツ子のやうにツしや。」

「お前悲しくなかつたか？」

「なんだか……」

「姉さんはお前に優しくしなかつたか？」

「姉ツ子すか？ ウム、とてもいゝ姉ツ子でがした。俺さ柿でも何でも半分は呉だのツしや。が

がさんは泣きしたぜ、ウム、うんと泣きした。なんだつてこのがき、くたばりがつたつて姉ツ子

さ泣きづくのツしや……俺とががさんと二人で土掘つて埋めしたが……」

「さうか〜。」俊一はいきなり立ち上つた。齋藤が驚きあきれてるのも構はず、何の挨拶もしな

いで林の奥に進んで行つて了つた。

## 三十一

感化院に子供が一人増してゐた。この佐々木は決して新たに感化院に送られたのではなく、元

わたのが戻されて来たのだ。別に悪い事をしたためではない、正式に歸るのには家がないからだ。彼はすつかり肺を冒されてる、子供の癖に肩が尖んがつかつた青瓢箪だつた。皮膚は全く艶がなく、飛び出たおでこ、許りが黒光りに光つた。しかし、それさへ脂氣がなかつた。彼は十五である。彼は刷毛製造屋の小僧にやられてゐたのだ。

「……毛搔きばかりやらせられんで御座りすからね、どうしても細かい毛が咽喉に這入るんで御座りす。初めは氣管が悪かつたのが、だん／＼肺迄やられたんだねし。」彼は大人のやうに妙にあつたまつた言葉で云つた。子供等は俊一の部屋に瀬戸火鉢を圓く圍んで坐つてるのだ。他の子供等が「氣管」なんかと云ふ言葉を使ふのが不思議で堪らなさうに彼の顔を見ると、彼は兩手を軽く火鉢の縁に載せたりして、氣取つて見せた。彼は軽い咳をした、咽喉をゴロ／＼させた。だが、少し身體がだるい丈けでさう苦しくはないと云つた。

俊一は彼を初めから厭な奴だと思つた。それは彼が今でも細かい毛が引つか／＼つてでもゐるか、のやうにゲロ／＼咽喉を鳴らしたり所構はず痰をしたりするためではなかつた。彼は厭にまかせてゐるのだ。まかせてゐると云へば感化院の子供等は各々それぞれの點で恐ろしくまかせてゐる。然し

彼等のまかせてゐるのは、それよりどうにもしやうが無いのだ。何れもその點では謂はば底抜けだつた。だが此の佐々木のは、市中の子供に幾らでも見られるませ、方だつた。大人の顔色を讀んだり、大人にうまく取り入る事をちやんと心得てゐるのだ。だから俊一は不愉快に思つた。佐々木は感化院式と云ふよりは寧ろ孤兒院式の子供だつた。

或る日暮方、佐々木は一人で俊一のところによつて来た。そして如何にも憐れツぽく咳をして見せた。俊一は飯をたく用意にか／＼つてゐた。

「……小畑さん、一寸ばりお願いがあつて来たんで御座りすが？」彼はいつの間にか手に井を持つてゐた。

「……………」

「どうしても南京米は滋養分がないと思ふんです、で、で、小畑さんの白飯とこれとを取り換へて呉れませんか？ どうぞお願い致して御座りす。」

「それは何んだ？」

「南京米で御座りすが。」

「ウム。君の云ふのはわかつた。併しそんなものは要らないよ。今飯は直ぐ出来るよ。寒いから這入つて待つてろ。」

「はア、でもこれを……」

「そんなものはいらない。」俊一は、盗んで來たに相違ない感化院の南京米を受取らうとは思はなかつた。「わかつた〜、這入つて待つてろ。」

「はア、それでも。」

「いゝんだよ。戸を開放しではお互に寒いから這入つて待つてろ。」

「はア。」彼はおづ〜部屋に上つた。

飯は出來上つた。で、俊一は熱いのを十分井に入れてやつた。

「もしいゝなら、毎日來い〜」

「はア。」

「遠慮なしに來い、米は要らないぞ。」

「それでは夕方一度でいゝですから。感化院では朝飯きり温かいのは食はせないんです、それに

南京米に麥をうんと入れるんですから。」

「一度でなくともいゝ。いゝか？」

「はア。」

「オイ一寸、君は何處の刷毛屋にゐたんだ？」

「××小路で御座りす。」

「ぢや、あの高等學校の寮の近くの角の家か？」

「はッ、小畑さん知つてして御座りすか？」佐々木は何故か井を落しさうに驚いた。井が熱いので彼は着物の上前に包んで持つてゐたのだ。

「……ウム。」

「……で、もう歸つても宜しう御座りすか？」

「あゝいゝとも、又お出で。」

「はア、有難う御座りして御座りす。」彼は乞食のやうに頭を下げてから闇に去つた。

(何だつて彼奴あんなに吃驚したんだらう?) 俊一は一寸頸をひねつてから、新しく自分の食ふ

飯を炊き始めた。刷毛屋は俊一の家直ぐ近所だったので、彼は子供の頃から店丈けは知つてゐた。佐々木が少し閉め残して行つた障子の隙から冷たい風が音を立て、吹き込んだ。ランプの笠がゆら／＼揺れ、灯が吹き消えさうに黒い油煙を上げた。彼は濡れ手のまゝ障子をしめた。

(飯は呉れてやるが、彼奴何て厭な奴だらう。でも永生きはしないな。) 彼は思はず獨語をし、そして嘆息した。

然し彼は不思議に氣持ちが軽かつた。飯の煮えた鍋を七輪からおろし乍ら、「熱ッ！」と大きな聲を出して、指先で耳朶を掴んだ。外ではゴーツと風が吹いて過ぎて行つた。臺所の雨戸がゴトゴト鳴り、木の枝が鳴る音がした。(……嵐吹く頃なり……) 數年前、女子部の文藝會で一年生の子供等が四五十名合唱した歌が頭に浮んだ。彼はその譜を靜かに口笛に吹きながら、手は急がしく味噌汁を煮る支度をしてゐた。(さうだ、今年ももう文藝會の頃だな、それに、市街ではどんな音樂會があるだらう? 近頃少しも口笛を吹かないぞ) 彼は種々の譜を吹いた。彼は口笛を一人で吹くのが非常に好きで又上手だつた。食事の用意はすつかり出来上つた。彼は一人で温かい食膳の前に坐つた。外ではもう一度風がゴーツと過ぎて行つた。(おゝおゝ、もう冬だ、全く冬だ。

だがお母さんはどうしてゐるだらう?……馬鹿! 馬鹿!) 彼は口笛なんか吹いてゐた一瞬間前の自分がひどい悪事をしてゐたやうに思つた。(あゝあ、俺は何をしなければならぬのか?) 彼は大急ぎに食事をし、鍋も椀も抛り出したまゝいきなり机に向つた。

佐々木は毎日飯を貰ひに來た。

ある午後、用もない頃一人で來た。(彼は勞働をさせられなかつた)

「小畑さん、いつも／＼お世話になつて濟みませんが。」彼は俊一の机の傍にかしこまつて坐つた。俊一は兩肘を机上についたまゝ、書物から顔を上げてゐた。

「……………」

「私さ手紙を一本書いて呉れませんか?」

「誰に出すんだ?」

「私の姉にです、切手は持つて参りして御座ります。」彼は懐から紙を出し、その間から三錢切手を一枚出して机の上に載せ、又頭をベコ／＼下げた。

俊一は一度苦い顔を作つた。

「姉さん？ 君の姉さんは何處にゐるんだ？」

「石ノ巻で御座りす。」

「それで？ まアそれより、君にはお父さんやお母さんがゐないのか？」

「え、え、お父さんは死んだのではないと思ひますがゐないんです。お母さんはありますが、外に嫁に、つまり後家が、さんになつて行つてゐるんで、私は顔も知らない位です。」

「ウム。で、姉さんと云ふのは？」

「姉は石ノ巻の病院で看護婦をしてゐるんで御座りすが、實は私を呼びに来て呉れと手紙に書いて頂き度いんで御座りす。どうしても保養しないと。」

「ウム。分つた。だが、それは君等のお父さん、つまり院長さんにお願ひした方がいゝだらう。」

「それもさうですが、さうすると六ヶ敷くなるんですが、つまり感化院は縣でやつて居りしてすからお父さんから縣廳に問ひ合はせてからにしなければなりませんから。それより姉が直接迎へに来て呉れれば、お父さんも安心して私を渡して呉れるやうな都合ですから、眞實に御面倒かけ

ますが。」彼は空咳をした。でも顔は全く疲れてゐるやうだつた。

「そんな事なら書いてやつてもいゝが、然し……」

「えゝ大丈夫です、どうぞこれツきりのお願ひですから。」

「ウム。よし、ちや何と書くんだ？」

「つまり、病氣が悪くて、感化院は火も碌にないし食べ物も悪いから、どうぞ手紙を見たら直ぐ迎へに来て呉れるやうにと、お願ひします、ですが返事は感化院に寄越さないで、小畑さん、小畑さんの處へお願ひし度いんですが。」

「……まアそれでもいゝが……よしツ、書いてやる。」俊一は自分は感化院の直ぐ近所にゐる書生であるがと書き出して、彼の意見のやうに佐々木の容子や事情を書いた。それから佐々木自身の願を出来る丈け丁寧に書いてやつた。

佐々木は姉のゐる病院の名は知つてゐるが、委しい番地は知らなかつた。

「有難う御座りす、小畑さん、有難う御座りす。」佐々木は、はじめて眞底から云ふやうに禮をした。「私が板橋に頼んで出して貰ひますから……」



「なアにいゝよ。俺が今に風呂へ行くから、屹度出してやる。そんな廻り道でもない。」

「さうで御座りすか。小畑さん、眞實に有難う御座りす。」

「この切手も板橋に買つて貰つたんぢやないか？」

「いゝえ、元から、元から持つてるんです。」

「……………」俊一は顔をしかめた、そして又來いと彼を追ひやつた。北側の窓の下を通りながら佐々木が痰をする音がした。俊一は机上の切手を顔から遠く離して取り上げた、次に舌では舐めずに水で貼りつけた。彼は直ちに立つて風呂に行つた。

（だが何故世の中に病氣なんかがあるのだらう。人を懲しめるためだ？ そんな馬鹿なこと。全く罪のない赤子でも病氣になる。病氣々々、肺病）彼は懐の中の手紙が蟲になつてわくやうな氣がした。（それより、何故病氣がある？ 肺病になれば誰しも嫌ふ、嫌はない振りをして親しく看病をしてやるなんかつて嘘だ！ ××先生が死んだ時）彼は中學で數學を教はつた若い教師を思ひ出した。（あの戀人だと云ふ女の人が東京からやつて來て日も夜も離れずに看病したさ、死骸に抱きついてキスするのを傍で人々がやつと離れたと云ふ。何と云ふセンチメンタリズムだ。そんな

な馬鹿な事あるか？ センチメンタルだ。……………だが何故あんな濃厚な先生が病氣に罹らねばならぬのか？ 何故？ 何故病氣があるのだ！ 病氣も存在なりと云ふのか？ 不貞操も病氣も世にありとあらゆるものは唯天の與へた存在だと云ふのか？ 馬鹿！ だから、何もかも滅茶苦茶だ！ あの子供等の親共のやうな奴等も唯人間であると云ふのか？ 男女が勝手に子をつくつて、その責任を飽く迄負ひ盡さない、何と云ふ怖い事だ！ おゝおゝ、何と云ふ怖るべき事だ！）

佐々木の姉から桃色の封筒が着いた。俊一の顔には思はず苦笑の表情が作られさうになつた。中からは水色の紙が出た。ペンで書いた読み難い字が書いてあつた。俊一の好意をくどく感謝して、弟を迎へに行き度いのは山々だが自由の身でないから今直ぐには行かれないが、その中に屹度屹度行くと云ふ文面だつた。弟の事よりは、俊一に餘り好奇心を持ち過ぎてゐるは明かだつた。「妾も囚はれの身の悲しき運命……………」そんな文句が澤山あるまるで所謂戀文のやうなものだつた。「妾佐々木は姉が直ぐ來ないのが不平だつた。もう一度手紙を書いて呉れと云ふのを、俊一は少し我慢しろとなだめてやつた。」

三日目に又桃色の封筒が来た。同じやうな事がくどく書いてあるのだ。更に二日過ぎると、愈々仙臺に行くを書いて寄越した。

「小畑さん、小畑さん！ 佐々木の姉ツ子が來したぜ。」畑山と西田とそしてお婆さん面をして常に畑山に従つて板橋が、晝の休みの時間に抜け出して走つて來た。「ウム。先刻來たの。お父さんと何か話してした。とてもたれか面をして澄し込んでる女ツしや。」彼等は、感化院に何はともあれ變化があるのを喜んでゐた。彼等は落ちついて居れずに報告文けしたと思ふと、又叫び聲を擧げ乍ら歸つて行つた。

佐々木は風呂敷包みを擁へて。女も小さな包みと木綿のコートを片手に持つて、子供等は後からソロ／＼従つて、俊一の前に來た。

「あの、弟が色々御厄介になりました、お蔭様で連れて行つて保養させる事にしました。え、ほんとに……」彼女は縁側の前で幾度も幾度も腰を折り、長たらしい口上を何時迄も述べた。それは、私は奥様交際でも何でも出來ますよ、この通り。と云つてるやうだつた。俊一は一度軽く頭を下げたが、手のつけやうがないやうに、又しても頭を下げて何か云つてる女をぼんやり見てゐた。

た。(あんな手紙を書いた女がこれか?) 彼女は肥つて、殆んど圓い顔をしてゐた。眼がしよぼしよぼに細いのだ。そしてだらしない程色が白過ぎた。頬が兩方眞赤なのだ。容貌も心の中も直ぐメタ／＼になりさうな女だつた。彼女は口上を切り上げて愛想笑ひをした。彼女はモジ／＼してゐた。他の子供等は面白さうに圍んで見てゐるのだ。佐々木も禮を云つて頭を下げた。俊一は急に彼が可哀想になつた。

「僕も橋の邊まで行きませう。」彼女等がかへらうとするので、彼は下駄を引つかけた。子供等は感化院への岐れ路迄ついて來た。そして立つて見送つた。俊一等は三人無言で坂を下つたのだ。橋の袂で女は又腰を折つた。

「さよなら、お大事になさい！」

「え、有難うございます、あのう……」彼女は袂をゴソ／＼させて急いで何かを出した。「これはほんのお禮のしるしで、眞個にお恥かしいものですが……」

「そんな事しないで下さう。」

「それでも。」女はいきなり俊一の前に近寄つて、小さな紙に包んだ四角なものを彼の手に押しつ

けた。俊一は間が悪くなつて、そのまま受取つた。非常に軽いものだった。

女は顔を眞赤にし、もう一度禮をし、佐々木も青い顔をしてのつそり立つてゐたが、急に思ひ出したやうに禮をした。二人は橋の上を行つた。俊一は坂道を登つてかへつて來た。(何時か丁度今日と同じやうな事を経験したな。あの橋のあの處で女と別れる……さうだ、民子さんだ。ウムウム、さうか) 彼は手の中の今渡されたものを見た。「敷島」が二箱包んであつた。(なんだ、煙草か、こんなもの買つて來なければいゝのに) 彼は坂の上からチラと橋の方を見た。もう二人の姿は見えなかつた。坂の上にも子供等はゐなかつた。

その夜、子供等が遊びに來た。

「小畑さん、あの佐々木の肺病野郎悪い奴ですがすて！」畑山と西田が口を揃へて云つた。

「何故？」

「ウム、俺達小畑さんから御飯を貰つて來たりするのは悪いやつて云つたら、彼奴、なアに小畑さんはお人好しだからいゝよ、あんな奴からは貰へる丈け貰つた方がいゝつて云つてした。」

「……………」俊一は危く赫とならうとした。今頃になつてそんな話をする西田や畑山の顔も急

に憎くなつた。

「あの肺病野郎、全く碌でなしさ。ね、小畑さん。あんな野郎は早くくたばつた方がいゝね！」

「……………」俊一は唇をビリ／＼顫はして、その夜は、話題が變つても何を問はれても、碌に返事をしなかつた。子供等も早く切り上げて行つた。

### 三十二

水のやうな、そして動かない空氣に白い細かい雪蟲がわいた。眞個の雪もチラ／＼降つて來た。感化院の子供等は我慢がならなくて朝飛んで來た。嬉しさがはち切れさうなのだ。

「小畑さん、小畑さん。なんの今朝はすがまツ子(すがまは)がギガ／＼と張りした！ほう、ほう、雪ツ子だ、雪蟲ツ子だ！」彼等の手の甲は赤紫に膨れ上つてゐる。皸裂が割れて血が流れてる。それを口に當て、フウ／＼吹く。息は直ぐに氷柱(つらば)になりさうだつた。俊一の部屋の前庭で寄り固まつて飛び上つた。

「ほう、ほう！ 雪ツ子だ、雪蟲だ！」低い雪空から雪の蟲がムン／＼とわいて来る。

鹽釜と石ノ巻通ひの蒸氣船から子供の註文が一人あつた。お父さんは畑山を選んだ。彼は喜んだのである、立身出世の緒だと思つた。初めは水夫ではあるが、船に乗る——彼の「海軍」の希望が幾分か達したのであつた。

「小畑さん、さよなら、さよなら。今行くところがす！」畑山は小さつぱりした綿入れを着せられて飛んで来た。

「さうか、もう行くのか。」俊一も部屋を飛び出した。走る畑山の後を追つて感化院の門まで行つた。地上には雪が少し許り積つてゐた。柵にも雪は積んでゐた。門の處に感化院の若い事務員が立つて待つてゐた。畑山は彼に連れて行かれるのだ。子供等は各々柵の間から顔丈け出して彼を見送るのだ。齋藤の鼻の下は一層赤くたゞれてゐた。のつつおな板橋の飛び出した耳は、すつかり霜焼けでくづれてゐた。「丸太」はニヤリ／＼してゐる。他の子供等は「チエツ！」と舌打ちしたいやうな顔をしてゐる。西田丈けは相變らず馴れだつた。

「さよなら！」

「……………!!!」子供等は眼で叫んだ。

畑山は嬉しさを包み兼ねて幾度も後を振り向いた。俊一は橋の袂まで行つてやつた。

「さよなら！」

「さよなら。しつかりやれよ！」

橋を渡り切る間にも三四度は振り返つた。俊一は立つてゐた。

六日過ぎた。

畑山はポロリと歸つて来た。彼は歸つて来たが、以前の畑山ではなかつた。すつかり痩せ切つて、眼の玉が飛び出したやうに見えた。一方の頬が紫色にむくんでゐた。全く怯え切つて顎の側の筋肉を細かくブル／＼頭はしてゐた。それは決して寒さのため許りではなかつた。彼は氣が遠くなつてゐるやうなのだ。

「どうしてお前歸つて来たんだ？」俊一は思はず優しく云つた。

「……ね、ね、小畑さん、とても勤まりません。あの船の親方達は言葉、(物を)代りに一つづつぶん殴るんです。何の用事か言つて呉れないでぶん殴るんです、そして、手前は感化院にゐたが、だから碌でなしだと口癖に云ふんです。いくら我慢しようと思つても、立つても動いても手を出しても物を聞き返しても、ぶん殴られんです、それに、あんな人達の下にゐたつて偉くなれつこありません。飯は碌に食はせないし、感化院の方が餘ッ程いゝです……」今迄一度も泣き顔を見せた事のない彼はポロリ／＼涙を流した。

俊一は何も云ふ事が出来なかつた。

お父さんは畑山の代りの子供を立てなければならなかつた。所がああ齋藤が自分から行き度いとお父さんに申し出た。

「どうしてそんな酷い處にお前自分から進んで行くんだ？」俊一は問うて見た。

「どうしてつて云ふ理由はがいん。」齋藤は眼に涙の薄膜を張らしてから、遠くでも見るやうな様子だつたが頸垂れた。

「ウム。」俊一は強ひて止めなかつた。

齋藤の出發する時も畑山の時と同じやうに子供等は柵の間から顔を出した。だが齋藤は、「さよなら。」を云はなかつた。始終頸垂れて許りゐた。畑山も柵の内側に立つてゐたが、彼は怒つたやうな顔をして外方向いてゐた。全く元氣がなかつた。

「しつかりやれよ。」俊一は又、橋の袂で齋藤の耳に注ぎ込むやうに云つた。相手は頸垂れてる頭をポクリと動かして見せたわけだつた。寒いのに御苦勞様だと云ふやうな顔をしてゐる若い事務員は、毛糸の襟巻に頸を埋めてゐた。齋藤は黙つて彼に従つて行つた。俊一が橋の柱の傍に何時まで立つてゐても、彼は振り向かなかつた。俊一の眼には涙が浮んで來た。彼はいきなり身體を廻轉して、坂道を走り登つた。

## 三十三

六日過ぎた。齋藤は歸つて來なかつた。十日過ぎても、彼の消息もなし歸つても來なかつた。

(あの齋藤は歸らない) 俊一は折々聲に出して獨語ち、吐息をついた。(矢張りかへらないで了ふかな。どうなるだらう? あの齋藤だ、鼻の下を赤くして眼を光らし、齋藤と書きやうを教へろと云つた、直ぐ縋りついて来るやうになる子供だつた。……おゝおゝ、それにしても俺は幾人あの橋の袂迄人を見送つたらう! こんな山の中に一人で生活してゐても随分人に送つたやうだ。一體斯うして一人で暮してるのは正當かしら? 傳ちちゃんのお蔭で金はあると云つても、來年の二三月迄には盡きる筈だ。傳ちちゃんはその後どうしてる? 民子さんもどうしてるだらう? ……あの齋藤がゐなくなつて了つたんだ……)

半ヶ月たつた。矢張り齋藤はかへつて來なかつた。二日前に民子から端書が來てゐた。

「其後御無沙汰いたしました。今日學期試験は終りました。愈々明日は東京に歸られます。あれから一度も通信はありませんがどうなられてるでせう? 愈々明日は參るのです。一度はお訪ねしなくてはならないと思つても私は訪問も他人への通信も出来る丈け控へて居りました。今年の冬は随分寒いやうですお身體を御大切に。貴方が神學部をお止しなつたのはつい近頃知りましたが、どうしたので御座いますか? お伺ひしたい心持ちも御座いますが、總ては新たな年となつ

て再び仙臺の地を踏んでからお訪ねして伺ひ度いと存じます、先は端書にて失禮かしこ

もうクリスマスなのだ。年の終りが數日に迫つたのだ。

日暮方から雪になつた。それは眞實の雪降りだつた。今迄のやうにフワ／＼した、綿を千切つたやうな雪ではなかつた。大理石の砂のやうにチカ／＼と固まつた、小粒なさうして隙間なしに降つて來るものだつた。見る／＼堅く積んで行く、その雪は何物にでも觸れればそのまゝ粘りついた。紙一枚位の戸の隙からも顫へるやうな音を立て、吹き込んで來るのだ。雨戸を閉める時チラと見た庭の細い立木の幹にも、半面は眞白く雪が粘りついてゐた。俊一の頬と云はず眼と云はず襟の中迄も吹き込んで來た。彼は障子をびつたり閉め、火鉢の前に坐つた。サアと雪は雨戸を打つた。益々劇しく降り出したやうだつた。ピチリと柱が割れる音がする。雪の夜にも拘らず寒さがひしひしと身に迫つて來た。遠い裏の林で木の枝が折れる音がはつきり聞えた。雪が崩れる音もそれに續いた。轟々と幽かではあるが地を傳はつて來るのは雪崩ではない、まだ雪崩の來る頃ではない、確かに太平洋の海鳴りの響だつた。サーツと雪は雨戸に吹きつけて行く……地上の有りと有らゆるものを白くしようと雪は荒れ狂つてゐるのだ。縦林もあのスロープの廣い落葉松

の林も谷間も向うの山々も、人の住む小屋も家も市街も、唯眞白に包まれようとしてゐるのだ。耳を澄ませば澄ます程海鳴りははつきり地を傳はつた。又ベリ／＼と裏の林の枝が折れる音がした。雪は一息の憩みもなく降るのだ。俊一は大洋に漂つてゐる汽船を思つた。それは淋しい孤獨な姿である。然し彼の血を湧き立たせるやうな感情があつた。彼が商船學校を止してから、まる一年になるのであつた。次に彼は齋藤を思つた。石ノ巻通ひの汽船と云へば僅か三四十噸の小さな汚ない船である。彼は中學の時、修學旅行のかへり海が荒れて夜になつても漂つて、汽笛を絶えず鳴らし乍らやつと鹽釜の港に入つた事があつたのを思ひ出した。水夫の働く處は吹き濡らした。物を言ふ代りに殴る人々の下で働いてる齋藤、矢張り、半ば口をあけて黙つてゐるかしたら？あの眼を光らせる折があるかしら？誰に取り纏らうとするのだらう？何時か夏の日林の中で吹雪の話をしてやつた。ぼつちり涙を眼からはみ出させてゐた——俊一は彼の記憶を一つ一つ喚び起した、其處には齋藤が一個の人になつて現はれた。ありのままの存在のやうにふつくり眼の前に浮び上つた。

雪の音に混つて人の足音がした。雨戸をいきなり敲くのだ。それは大勢だつた。(おや、こんな

夜に子供等が來たのか?) それでも彼は非常に人懐かしくなつて、急いで立つて雨戸を引いた。サーツと吹き込む雪に押し上げられて、子供等はドヤ／＼這入つて來た。皆元氣だつた。頭も肩も白くなつてるのだ。

「下駄を縁側の隅に上げて置け！」最後に畑山が一人の新しい子供を背負つて上つて來た。縁側で雪を振り落し、彼等は火鉢を圍んだ。五人ゐた。

新しい子供は眼は開いてゐるが兩眼共瞳に卵の白味のやうなものがかゝつて、光なく見開いてゐた。彼は瘦せ形の色の白い美少年型だつた。十三位であらう、黒木綿の紋付き羽織を着てゐる。彼は東京辯だつた。それが子供等の輕蔑的になつた。絶対に見えないのだと言ひ張るのだ。東京も下町辯を得意らしくわざと舌を圓めるやうに喋つた。

西田が俊一の直ぐ隣りにゐて、肘で突いて耳に囁いた。「ね、小畑さん、彼奴少しは見えるんてがすつて、嘘云つてやがるの。」高い聲になつた。「あたいだつて、東京辯なんかつてたれか言葉だな。笑はせやがる、フムだい！一體お前東京で何してだのや？」

「あたいかい？ 師匠をとつてたんだよ。近頃ちやお得意廻りもさせられたんさ。何しろ濱町だ

「からな、多くは姐さん達の足を揉んでやるんだよ。」

「フム。」西田は又鼻の先で笑つたが、どの子供もよく此の盲目の子供が云ふ意味はわからなかつた。然し西田はわかつた振りをした。「其處でお前がやつたんだなア。」

「何をさ？」

「たれかこぎやがるな、一寸かつばらひをやらずに感化院に寄越される奴があんめいちや！」西田も仙臺辯で舌を圓めた。

「かつばらひなんかつて、そんな下司はやらねえや……まア足を擦すつてみりやその姐さんが別嬪か別嬪ぢやねえかちやんと分るんさ。其處はお前、數を手にかけてなくちや。」

「何、何をへんてこりんな事を此奴ぼさきやがるんだ。別嬪だつて、眼も見えない辯に。お前だつて矢張り元は仙臺生れだんべ！」

「それは元はさうさ。」

「そんな話止せ！」俊一は苦い顔をした。

一同は黙つて了つた。外の吹雪は益々劇しくなつた。それに耳を傾けると云ひ合はしたやうに

各々口をつぐんで沈み込んだ。畑山は歸つて以來どうかすると一人で呆然としてゐる折が多くなつた。何か考へ込んでるのだ。そしてオド／＼してゐた。彼には元の「頭」の面影がなくなつた。此の夜もしよげてゐた。身體を顛はしてるやうにさへ思はれた。齒を喰ひ縛つてゐるやうにも見えな。然し俊一の眼は此の夜板橋から離れなかつた。彼は常になくムツツリ怒つたやうな顔をしてゐるのだ。左の眼の縁が腫れ上つて、眼を開かれてなかつた。お婆さん面は一種の耀きの中に消え、耳を澄まして外の吹雪を聞いてゐた。サーツと雪を吹きつけて行く。一同は森としてしんみり寄り添ひたいやうな心持ちになつて來た。五分、七分。誰も黙り込んでゐる。裏の林で雪が崩れる音がする。地を傳はる海鳴りは幽かに絶えず響く……

「……今日は農夫長、板橋を随分ひどくやつたなア。」西田も流石にしんみりした聲になつた。

「……」口を出す者が無い、察するに板橋は殴られたらしかつた。

「どうして今日に限つて菓子を買つてるのが見つかつたかなア、こんな吹雪の日にさ。」西田は同情するやうな聲だつた。

「どうでもいゝだ！」一分も時間を置いてから板橋は吐き出すやうに云つた。彼の唇は歪んだ



眼は火のやうに燃えて來た、平常の薄ぼんやりは姿を消して無氣味なところばかりが強く顔全體に擴がつた。「めんどう臭くなつたら、農夫長の野郎たゞき殺すか、彼奴の家に火を放けてやる丈けだ！ どうせ俺は放火犯だ。父つつあんはウン／＼呻つて寝てたんだ。」

「父つつあんでお前のか？」

「ウム、きまつてらア！」板橋が斯う云つた權幕に西田は言葉をくちかれて了つた。一同は思はず眼を光らし、息をひそめた。彼が身の上話をするのは初めてなのだ。「父つつあんがデロ／＼痰を吐くんだ、痰壺がないから一度ぎりに蒲團を這ひ出してつて庭さ吐くんだ！ ががやんは汚ねえつて云ふさ、『此の老ぼれ親爺早くくたばりやがれ。』つて、毎日蒲團の上から蹴飛ばすんだ！ 父つつあんだつてそんなに年は取つてゐねえや。俺の家は此の河のすつと上なんだ、淀み橋のもつと上だ、あの騎兵練兵場の近くの河原だ。元結ひや水引きを造つてだのや。其奴とががやん二人で毎日早くくたばりがれつて父つつあんを蹴飛ばすんだ！

其奴つたあ家の飯食つてる職人や。父つつあんは『どうぞ小便丈けさせて呉れ。』つて、お終えには手を合せて拜むんだ。何しろ痰吐きにも動けなくなつたんだから。俺が手を出すとすれば殴り

飛ばされたさ。俺はからきしがぎつ子だつたし、其奴は大人の職人だ。『勝手にたれ流せ！ 豚つ子！』ががやんが云ふさ。『手前がそんなら病氣をしてるお蔭で、所帯はなくなる許りだ。俺が働かなかつたら今頃は乞食をして野倒れ死にだんべ……』

何しろ二人がかりで毎日蹴飛ばしたんだ。父つつあんは聲を立て、泣いたさ。瘦せ枯れた手を合はせるんだ。お終えにはぐだつとして何も云はなかつた。泣きもしなかつた。唯メソ／＼泣くんだ。『お君罰が當るぞ、罰が。恐ろしくないか。俺がいつ、十年の上も斯うしてゐて、いつお前に邪怪にした。な、お君、お君、罰が當るぞ。』メソ／＼泣くんだ。『十年の上が聞いてあきれらア、此のがぎのお蔭でオメ／＼、手前のやうな意氣地なしについて、何のいゝ目を見た、年中食ふや食はずのガツ／＼だ、これで一生終つて堪るか！……』

父つつあんは三日も四日も黙つてゐたよ、咽喉をゴロ／＼音をさせて。だが死んで了つた。その時丈けお醫者さんが來た。だが死んでるんだ、お醫者は頭をひねつてゐた、そして書附を呉れたんだ。棺桶につめ込んで寺さ持つてつたさ。『あゝあ、これで清々した、今度はこのがぎ許りが残りやがつた。』俺の事を云ふんだ。ががやんは毎日酒を食ふんだ、其奴は元から飲んだが……

其奴の事を、父つつあんで云へつて云ふのさ。俺は言はなかつた。天井に引ツ吊しやがつたんだ、俺の手足をぎり／＼縛つて天井からぶら下げたんだ。毎日毎日、そして二人で引ツ敲くんだ。棒で殴りやがるんだ。頸を下げると血が皆頭さ行きやがつてグル／＼家が廻るんだ、頭を上げてるととてもこわく(こわい)で堪らないし、俺は眼をつぶつたさ。自分で生きてるんだか死んでるんだか全く分らないんだ。繩が手足にメリ／＼めり込みさうに痛いのもお終えには分らなくなつた。下では二人で酒盛りをしやがつた、そんな時俺はちらつと見たんだ。ががやんが鶴の頸のやうな手ツつきをして徳利を持つてやがるんだ、俺は何より癢に觸つた。「くそつ！ どうするか見てやがれ！」俺は腹ん中でうんと力を入れてゐた。……

『どうするか見てやがれ。』と思つてもそれ切りなんだ。たゞ、俺はさう考へたんだ。『どうするか見てやがれ。』俺は蹴飛ばされたさ、時々引つ張り出されてぶん殴られたさ。便所に行くのにも其奴がついてやがるんだ。後は押入れにたゞき込まれてるのさ。ががやんが小さな握り飯を投げ込んで呉れるつきりだ。『どうするか見てやがれ。』さう思つたがどうしていゝか分らない、何しろ俺はからきしのがぎつ子だ。何だか身體がへト／＼になつて前にのめり込むんだ。蚊がさしやが

る、まだ秋にならねえ頃だつたからな。ががやんと其奴は酒盛り許りやつてキヤツ／＼と騒ぎやがるんだ。近所に家があるわけでなし、何處へ聞えるでねえだ。俺は逃げて行く處もないんだ。『どうするか見てやがれ！』トロ／＼眠つて目を醒ますと又俺はさう思つた。……

丁度、揉み錐があつたんだ、大きな揉み錐だつた。其奴にいきなり投げつけてやつたんだ。丁度にうまく打つ刺さつたさ、ウム、柱さおつ立つたやうに揉み錐が其奴の腿太さブツツリホツ立つたんだ。血がタラ／＼流れて來た。いつも尻をまくつてやがるんだから。そんな時の其奴の顔を見た時は俺はブル／＼顫へ上つた、飛んだ事をしたと思つた。一層たゞき殺して了ふんだつたと思つたさ、だつて本當に死ぬ程ぶん殴られたんだ。氣が遠くなつたさ、眼を醒ましたら變な處にゐたんだ、よく見ると物置き小屋の中なんだ！ 物置き小屋と云つても元は職人が宿るやうになつてたんだ。藪が二枚敷いてあるのよ、隣りは風呂場になつてるのよ……

戸の外で其奴とががやんが何か大聲で云つて喧嘩してだよ、ががやんもぶん殴られたやうだつた。と、風呂場の方の戸がガタ／＼したと思つたんだ。今迄喧嘩してやがつたのが急に静かになつたんだ。俺は見なくなつたんだ。風呂場との仕切りの壁の上の方に四角な穴があつた、其處に

ランプが載つてゐるんだ。俺は臺を作つてその穴から風呂場の中を見たんだ。……

「よく見ると喧嘩してゐるんぢやねえんだ。俺は何か、うんといきなり聲を出したかつたが、どうしても聲が出ないで、ブル／＼顛へる切りだつたよ、でも俺は見えてゐたよ、男が立ち上つたんだ、ニヤ／＼笑つたよ、蕩かし込むやうに笑ふのは其奴の元からなんだ。ががやんは手を垂らして男が出て行つてもぐつたりしてやがるんだ。そんな時俺は聲が出た。「罰が當るぞ、恐ろしくはないか？」死ぬ前に父つつあんが何遍も云つた言葉だつた……」

「あら／＼なじよに此のが、見てんがつたのか？」ががやんはいきなり立ち上つたと思ふと、物置の戸の前にガタ／＼してから開けて、眞赤になつて這入つて來やがつたんだ。そして小さくなる俺の頭を滅茶苦茶に打つたり、耳を引つぱつたりしやがつた。其奴も來て、一つガンと俺の頭をやつつけてから、ががやんを抱くやうにして連れて出たんだ。又戸を閉めてしん張り棒をかけやがつた。俺は泣いた、なんだか知れない、その時に限つて涙が出やがるんだ。薄暗くなつても誰も來やがらねえんだ。夜になつた。「どうするか見てやがれ！」俺は、又さう思つたさ、そんな時

俺は晝間見たのを思ひ出したんだ。ランプにマッチだ。手探りで臺に上ると石油の匂ひが鼻の先でしやがつた。俺は石油をぶちまけて、マッチを擦つた。空俵が燃え上がりやがつた。俺は夢中で雨戸を蹴飛ばして外に出たんだ。然しその音で其奴が飛んで來て俺を引つつかめえたさ。火は燃え上がりやがつた。眞赤に燃え上つた。「それ見やがれ！」引つつかめられて柱に縛られ乍らもさう思つたさ。ががやんはばけつ、を持つてウロ／＼してのがよく見えるんだ。其奴はががやんに「間抜け、間抜け！」つて怒鳴つてた、だが、手では俺をギリ／＼縛りつけてゐるんだ。「畜生、畜生！」ががやんも、其奴もうろたいてゐるんだ。「ざま見やがれ！」俺はさう思つたんだ。でも外の人達もかけつけて來て物置小屋丈で火は消えたんだ。……

警察でも巡査つ子共め、靴で蹴飛ばしたり、ぶん殴つたりして「白狀しろ、白狀しろ！」つて云ひやがつた。俺は黙つてたさ、何も白狀することがなかんべえ、何を白狀しろつて云ひやがるんだ。劍子だのガチャ／＼させやがつて、其奴も何時の間かに巡査の後の方に立つてやがつたんだ。俺は劍子なんか恐ろしくねえや、何とでもしやがれ、勝手にしやがれ、と思つて俺は黙つてたんだ。「強情な野郎だ」つて云ふんだ……

三日ばかり警察の牢屋の中に置かれた。毎日引っぱり出して白状しろを云ひやがんだ。同じ事ばかり言ひやがる。俺は何と云はれても黙つてた。どうともなれ！ さう思つてたんだ。それつきり此處さ寄越されたさ……ウム？ ががやんすか？ 來した、二度ばり來した。大福餅だの持つて來した。「食べろ、食べろ、ががやんは直ぐに歸んねえと悪い、一寸ばりひまを見て來たんだから。」つて云ふのツしや、誰が、そつたら大福餅なんか食ふツけな、メソク泣いてけつがるのさ、俺は「いんねえ」とたゞき投げて應接間を出て來した。ウム、誰が……」

「よし、もうよしッ！」俊一は叫んだ。外の吹雪はまだ止まない、却つて一層劇しくなつてゐた。「かへれ、もう皆かへれ!!」

恐しい権幕で俊一が叫んだので子供等は匆々に動き出した。雨戸をあけるとサーツと雪は吹き込んだ。西田は先頭に飛び出して、「ヤツ！ ヤツ！」と一種の喊聲を擧げた。盲目の子は畑山の背中に載せられた。板橋はムツツリ黙つたまゝ最後に、雪降る中に走りもしないで出て行つた。俊一は大急ぎに雨戸をしめ、蒲團を引き出し、ランプを吹き消して寝て了つた。彼の耳には外の吹雪の音も裏の林の木の枝が折れ雪が崩れ落ちる音も、今は聞えなかつた。彼は闇の中でピツカ

リ眼をあけて光らし、身體を顫はしてゐた。彼は自分の二つの眼が動物の眼のやうに光つてゐるのを自分で自分に見えるやうに感じた。……

## 三十四

ふと眼を醒ました。よくも平氣で眠つたりしてゐられたものと俊一は思つた。外の吹雪は全く静まつてゐた。部屋の冷たい空氣は滲々と襲ひ迫つて、水の底に寝てゐるやうな氣がした。まだ夜は明けないが、曉が迫つてゐるのは水のやうに冷たい空氣で分つた。(よくも眠つてゐられたものだ、よくも平氣で、よくも……)彼はむつくり飛び起きた、素足が疊に觸れて、その冷たさがピンと頭の奥迄傳はつた。彼はいきなり机の前に坐り、ランプに火をつけ、ノートを出し、ペンを執つた。ペン先きをインキ壺に差し込んだが、思ふやうに差し込めなかつた、何か悶へるものがあるのだ、彼は二三度力を入れてみた、インキ壺の中はインキがなくて何がゾク／＼したものがあつた。インキがすっかり凍つてゐるのだ。彼は兩手の間にインキ壺を堅く握つた、そして

息を吹きかけた。やつとインキは解けた。

「彼等をどうして不良兒と云へる！ 所詮人間の姿である、人の子である。唯不幸な子供等なのだ。母、母、わが母も不幸な人なのだ！ 自分はその母を捨て去つたのだ、自分は不孝者とは決して思はない、自分は不孝兒ではない、だがあの不幸なる母を愛しきらずに自分は何事をなし得よう！ 母は不幸だつたのだ、自分は母即完全を要求した、否さう思つてゐたのだ、然しあれが人間の姿である、而も母は自分を養はねばならなかつたのだ、此の自分を成人させねばならなかつたのだ！ 何の罪だ！ 誰の罪だ！ 剩餘ある者共の剩餘を持って餘しての罪、それより恐るべきものがあらうか？ あの齋藤は飯を食はねばならなかつた。死に瀕してゐる母親にも食はせねばならなかつた、だから他人の家から飯を持つて來た。彼は唯生きてゐる、如何なる虐待の下でも黙々と生きてゐる、彼こそ貴い！ 畑山は幻を描かずに生きてゐられない、親に振り放たれた彼は憧れと幻を追つて東京に行かねばならなかつたのだ。いくら木の根に犬の形を刻んでも彼の幻は消ゆべくもない！

あの人々に石にて打ち殺されんとした姦淫せる女を許し、彼女を罰する力がないと自ら淋しく

も地上に字を書かれし基督の心は今びつたり自分に分る、三十歳迄の基督は何をしてゐた？ 彼は不貞の母マリヤのために苦しまなかつたか。苦しんだのだ、苦しんで苦しみ抜いたのだ、そして初めて彼は愛し得たのだ。自分もあの母を先づ愛し切らずに何をなし遂げ得よう！ 自分は恐るべきエゴイストだつた、恐るべきエゴイストなのだ！ 母よ、母よ、自分は御身の許にかへる、今日直ちに歸る。されど自分は母にのみ孝行するために歸るのではない、先づ母を愛し切らねばならぬのだ。お互に甘えた心持ちの孝行するために歸るのではない、自分は母の傍近くにて自分を試鍊するために歸るのだ！ 愛するがために傍近く寄らねばならぬ理由はない、それは動物的愛に外ならぬ、自分はこの母と顔をつき合せ而して愛し切り得るや否や試鍊する覺悟である！ 自分は自分及び肉身の幸福のみ思ふべきでない、自分の前には全世界、全人類があるのだ！ 母よ、母よ、自分はかへる、そして許しを乞ふ。されど最も恐るべきは自分が自分の心持ちに甘えて……」

彼は茲迄やつとペンを運んだがそれ以上どうしてもペンを動かさなくなつた。指が寒さにすっかりがじかんだのだ。いくら努力してもペンはぼろりと落ちて了つた。彼は膝の上に両手を握り

合はして、自分の心持ちを胸の中で書きしるした。それは彼の胸の中の神に對する眞に最初の祈りであつた。(神よ、神よ、私は今日生みの母の許にかへります。私に眞の力を與へて下さい。誘惑を取り去つて下さい、私に眞に人のために働き得る力を與へて下さい、その時こそ眞實の心の安らぎが來ると信じます。私の肉體に來る苦痛は如何にしてもこれを忍びます。何卒力を與へて下さい。私に自分を信じ切る力を與へて下さい……)彼は寒さを忘れて頭を垂れてゐた。

(さうだ、俺はかへる、俺はかへるさ！ そんな事、母を辱めた世間なんかと云ふものは度外視していゝんだ。今世間に對して憤慨してる場合ぢやない……何より斯うして俺が一人の生活、隠遁したやうな生活をしてるのは卑怯だ、何より卑怯だ！ 何故に今迄これに氣がつかかなかつたのか？ かへる、歸つて母に許しを乞ふ……)その日の晝間中、彼は立つて部屋の中を歩いて見た、机に腰かけてぼんやりしてゐた。歸るのは夕方でなければならぬやうな氣がしてゐた。何故今の場合さう愚圖々々してるのか？ 自分でも分らなかつた。疊に根が生えたやうに立ち上つて指を一本づつボキリ／＼鳴らした。頭を振つて眼を上げた。

深く堅く積んだ、日の光りがキラ／＼光る雪の上を歩いて、彼はもう二度程感化院の柵に近寄つて見た。柵も畑も廣場も建物も硝子窓も雪に埋れてゐた。軒から下がつてゐる氷柱が光つた。二度目の時はポタ／＼水滴を滴らしてゐた。然し子供の姿も見えなければ物音一つしなかつた。子供等にも會はず、荷物も持たず、マントに包まりムツツリした顔をして、黄昏れた許りの市街に彼は下つて行つた。道行く誰からも彼が母の許にかへるのを知られたくなかつた。興奮して來、胸が波打つて來るのを腹立たしく思つた。足に力を入れ、體をのばした。然し母とその家が一步毎に近づいてゐるのを彼は胸の中に取り／＼と感じた。

## 三十五

針仕事を展げてゐた母のお勢は暗い電氣の下で顔を上げた。何者が現はれたのか見極められない眼玉は、大きく見開いた。その瞬間俊一は見た、彼女は一層痩せて、顔色は青白く、寧ろ透き通る程白く、骨ばつて眼が大きくなつてゐた。格子戸をあけるのにも障子をあけるのにも腹立た

しい程動悸したのが、その瞬間彼は總てを忘れて了つた。唯不憫の情に打ち負かされて、彼は其處に足を折つて倒れるやうに坐つた。彼は頸を垂れた。

「お母さん、唯今かへつて参りました。」

「……………」

俊一は自分のわななく感情に負けて聲が出なかつた。彼は吸り泣いた。呑んでも呑んでも涙は後から湧き上つた。全く豫期しない事だつた、自分自身がすっかり見えたやうだつた、彼は自分の感情にまかせきりたくなつた。

「許して下さい、僕は、僕はかへつて來ました。」

「……………何だつて許せんかかつて、俊一、俊一、お前ずつと家にゐて呉れるのか？」彼女は泣かなかつた、頭を下げた彼を見張つたまゝ顛へてゐた。

「はい……………」

「俊一、やめなさい。手をついてあやまるのはやめてくれない。」彼女は急に瘦せた肩を顛はして袖口を眼に當てた。「やめてくれない……………お母さんが、お母さんが……………俊一、ずつと家にゐて呉れるの

か？」

「えゝ、ゐます、ずつとお母さんの傍にゐます。」

「……………ウム。な、俊一、泣くのはやめてくれない。留守の中に學校から荷物が來てした、向うの部屋にがす、向うの部屋に……………」彼女は吸り泣くのを止めなかつた。

「お母さん、許して下さいさるんですか？」

「そんな事、そんな事云はなくとも。向うの部屋に荷物があるから、向うの部屋で……………」

「え、分りました。もう僕泣きません。」彼はそれ以上何も云ふ必要がないと思つた。總て母とは昔のまゝ融和したと思つた。彼は心が安まつた、だが二人の間の息が詰まるやうなのはどうしてもとれなかつた。それが今、母も自分も非常に不幸な人々のやうに、取り残された人々のやうに感じ合つてゐた悲しさと情に殉じきつて了ひたい心持ちに更に新しい悲しみを加へた。彼は黙つて立つて隣室に行つた。

三疊の部屋の隅に新聞を貼りつけた大きな茶箱を見た。彼が前年貼つたものなのだ、その上に糸は解いてあるが大きな小包みがあつた。そつと開いて見ると毛布やシャツや、その間から商船

学校の教科書やノートが出た、彼が學校から給與されたものだつた。彼はそれをそのままにして箱の上に腰掛けて頸を垂れた。何を考へてるのか自分でもわからなかつた。ふと氣がついたやうに顔を上げた。可なり時間はたつたと思つたが、隣室の母は物音一つたてないやうだつた。吸り泣いてもゐないやうだつた。彼は立ち上つた。そして隣室に足がフラ／＼動かうとした。然し部屋の仕事に立つて彼は釘づけになつた。片手に載るやうな母は向うを向いて端坐してゐた。彼女の頭の上方の佛壇には、細い蠟燭と二三本の線香がともつてゐた。彼女は顔を上げて佛壇を見た、手を合はせて口の中で何かを唱へてゐるやうである、頭は次第に垂れて又上がる、彼は後からその横顔を見たのだ、彼は音もさせず元の箱に戻つて腰を下ろした。思はず吐息をした。母は餘りに青白くなつてゐたのだ、氣味が悪いやうに、不自然に青白い。彼は此夜最初に母を見た瞬間、電燈の下で顔を上げて、大きな眼をキョトンと見開いたのを思ひ出した、それは思ふまいと思つても狐のやうだつたのを眼の奥から拂ひ除ける事が出来なかつた。

「さうだ、俺は歸つて來たのだ、だがこれ以外の事では有り得なかつたらうか？ 昔の母ではない、昔のまゝの母では。……昔の母ではなく、自分が捨て去つた日の母だ、或はそれよりもつと

悪い状態！ おゝおゝ、これ以外では有り得なかつたのだらうか？ 昨日、今日、俺が胸の中で描いた母は？……然し實は心の中ではどんなに喜んでゐて呉れるか知れない、俺は愛し切らなくて、母を愛し切らなくては……）彼は闇の中で眞直ぐ見詰めた。雪に埋もれた街も家の中も森として物音一つしなかつた。母が佛壇の前に合掌しては口の中で何かブツ／＼云ふのが聞えないのではあるが、聞えるやうな氣がした。彼の身體は細かく木の葉のやうに顫へて來た、決して寒さのため許りではなかつた。……

「俊一。」靜かな聲が向うでした。「もう寝すべ、此頃ではお母さんは夜になれば寝ることにしてだの。」

「は。」急に目が醒めたやうに立ち上つた。「……僕が敷きます。」彼は奪ふやうに母の寢床を敷いた。お勢はオロ／＼してゐたが、火の始末にかゝつた。二人は口をきかなかつた。俊一がねるためには蒲團が足りないので、小包から出した毛布と座蒲團で用意した。二人は口をきかないで並んで床に這入つた。恐しいと云つて電燈を消さないのはお勢の昔からの癖だつた。俊一は毛布に顔を埋めた。



夢を見てゐた。眠りつくると直ぐから夢を見てるやうだつた。恰も眠るのが罪惡でもあるかのやうに、夢の中で、眼を醒ませ、目を醒ませと何ものかに引つ張られてゐた。彼は何者かに非常に驚いて目を醒ました。思はず「あッ！」と口の中で叫んだ。

白つばい寝巻姿の母がキチンと彼の目の直ぐ傍に坐つて、彼の寝顔をヂツと見てゐた。

「……どうしたんです？ どうなさいました？ お母さん！」

「……………」

「お母さん！ お母さん！」彼もむつくり起き上がつて坐つた。

「……俊一、このお母さんを勘辨して呉ろ。」彼女は両手をついた。

「何を云ひなさるんです、お母さん。私こそ許して下さいと云つてゐるんです。」

「そんな事ない、お母さんば勘辨して呉ろ、勘辨して……」

「止して下さい、止して下さい。お母さん、お休みなさい、風をひきます。」

「ウム、な、俊一俊一、もう何處へも行かないで呉ろ。お前は今迄何處にゐたんだ？」

「知らなかつたんですか？ 私は向山のお寺にゐたんです。ね、お母さん、お休みなさい、決し

て私はもう何處へも行きません。」

「眞個か、行かないで呉れるか……向山のお寺にな、お寺にな……」

「お母さん！ どうぞおやすみ下さい！」

「分りました、分りました。もうわしはお前の云ふ通りになる、な、勘辨して呉ろよ。」

「分りました。お母さん。」

「どうぞ、な……」彼女はそろ／＼と寢床に這入つて了つた。

俊一もそれ見るといきなり毛布に包まつた。彼の身體は又顫へだした。母が彼の留守中どうして日を送つてゐたのだらうと初めてはつきり考へた。彼は母が不憫で堪らなくなつた、と共に白い寝巻姿で彼が眠つてゐる間彼の寝顔を見てゐた母を思つた。背中から水を浴せられたやうに寒くなつた。

次の朝も母は早く起きて佛壇の前に永い間坐つてゐた。曾ての彼女にはない事だつた。朝見ると彼女の顔は一層不自然に青白かつた。彼女の一舉一動は急に十年も年寄つたやうだつた。

俊一が山に荷物を取りに行かうとした時、彼等は殆んど怯えたやうな顔をした。「大丈夫です、直ぐかへつて來ます。」俊一は思はず聲高になり、そしてムツツリした表情を作つた。

(矢張り無知なのだ) 荷車屋を後に從へて雪道を歩きながら、全く無意識でさう頭の中に繰り返してゐた。向山の坂道の途中で亞炭を積んで來る櫓に會つた。彼は道を避けた。その瞬間、(矢張り無智なのだ)と繰り返してゐた自分にハツと氣がついた。(あゝいけない! いけない!)

一臺の荷車に荷物をすつかり載せ、二人の人夫はそれを曳いて行つた。一年住んだ空になつた部屋を見まはした。

住職に最後の挨拶をし、マントの襟に頸を埋めて彼は感化院の方に雪の上を歩いて行つた。左手の縦林の枝と云ふ枝には雪が重さうに積んで垂れ下つてゐた。藪の雪は彼の進むに従つて地に顛へ落ちた。子供等の姿は見えなかつた。柵の前に呆然と立つて見たが、彼は頭を振つた。しかたなく彼はのろ／＼門の方に廻つた。彼等は其處にゐた。「丸太」も西田も他の子供等もそして畑山も板橋も。むく／＼した着物の裾を一樣にたくし上げた彼等の汚ない股引きをはいた足は、膝

迄ぬれてゐた。各々藁靴をはき、手に雪掻きを持つて黙々と道の雪を除いてゐた。門の柱近くに農夫長が立つて嚴しさに監視してゐるのだ。畑山、板橋、西田と三人は固まつて働いてゐた。雪掻き板を雪に差し込み、力を入れて持ち上げると、その雪を抛り投げる。一樣な動作を同様に繰り返してゐた。投げられた雪はパツと散つた。俊一は向うで農夫長が見てゐるのも構はず畑山に聲をかけた。

「な、俺は今日きり市街へ下りて行くんだ。」

「え？」畑山は一寸手を休めて相手を見上げたが、農夫長が監視してゐるのを忘れない彼は、又手を動かした。

「俺は今日きり、あの寺にゐないんだ。お別れに來たんだ。」

「小畑さん、眞個すか？」西田が口を出した。「どうだか？」彼は俊一が眞剣な顔をしてゐるのを感じることが出來ないのだ。俊一はこの道化者は永久に救はれる道がないやうな氣がして、顔をしかめた。板橋は外向むいて働いてゐた。俊一は彼の顔を正視出來なかつた。

「眞個だ、お別れに來たんだよ。」俊一は子供等に最後として何か云ひ度い事があつたやうな氣が

したのだが、その上口をきくのが厭になつた。彼は農夫長の方を見なくもその眼を感じた。

「あゝさうですか。」畑山が云つた。

「さよなら。板橋もさよなら。」彼は急いで足を廻轉して了つた。(農夫長の畜生!) 無暗に反抗したい心持ちで彼はグン／＼急いだ。然し道を曲り角で振り向いた。板橋と他の子供等も前の通り働いてゐた。畑山と西田は一度呆氣にとられて彼の後姿を見送つたのであつたが、今は堅い雪に雪掻きを差し込むのに努力してゐた。農夫長ばかりは遠い向うから彼の方を無感覺な人のやうに見てゐた。俊一は急いで角を曲り、坂道にかゝつた。

## 三十六

新らしい年になつた。

母の家にかへつて四五日になるのだが、母と彼の間は變りがなかつた、母はひまさへあれば佛壇の前に坐つて合掌し、何か口の中でブツ／＼云つた。彼は三疊の部屋に机を据ゑて、それに向

ふのだが、茶箱に腰かけて考へ込む方が多かつた。お勢は高利貸の杉田の家へは通つてゐなかつた。近所の人々、殊に直ぐ隣りに大きな門があり、廣い屋敷を構へてゐる家主の若主人夫婦が同情して、針仕事を澤山世話して呉れてゐた。母にすゝめられて、俊一は家主の湯澤に新年の挨拶とお禮に出掛けた。間口の廣い舊式な玄關の前に立つた。

女中は一度奥に行つて來てから、

「何卒、失禮ですがあちらの西洋館の方へお廻り下さい。」と云つた。右手にペンキ塗りの洋館があつた。彼はその入口から這入つて、廣い若主人の居間に直接通された。女中は瓦斯煖爐に火をつけてから去つた。

部屋の中は可なり亂雑だつた。然し處狭い迄置いたり飾つたりしてあるものは總て若主人の好みに依るものばかりだつた。若主人と云つても四十近い人で、大學迄行つたと思ふと直ぐ退學して、獨逸に行き、獨逸を中心に歐洲の各地を十年近く遊んで來て、今は頼まれゝば先生の不足の時高等學校の講師をしたり、所有地や家作の管理をしてゐる、非常に快活な人だつた。常に高等學校の學生を家に寄せて、總て獨逸式に快活に話し、笑ひ、歌ひ、興が乗ればダンスをして見せる人

なのだ、而も拍車づきの長靴で踊る、「音楽がなくちや駄目だ、音楽、音楽！」と叫ぶのだ。

「やア！」元氣な聲を出して、堂々と肥つた子供のやうな圓顔の若主人が現はれた。彼は軟かい和服をぞろりと着て、その下から光澤のいゝ滑かな膚を持つた營養のいゝ肉體の筋肉の動きが一つ一つ分るやうに歩いて近寄つた。俊一は眞直ぐに立ち上つたが、若主人の方が背が高かつた。

「お目出度う御座います。」俊一は口の中で然しはつきり新年の賀辭を述べた。

「やア、お目出度う！ さア掛け給へ。實は餘りお目出度くもない、正月なんか毎年同じやうな事をやつてるのは寧ろ考へると滑稽だね、はゝゝゝゝ。」彼は腹の底から出すやうに笑つた。「もう僕なんか朝の中にほんの義理に二三軒廻つて、後はこの通りだ。もつと此方へ寄つて掛け給へ。素的に寒い。」彼は椅子を煖爐に寄せ、俊一にもさうさせた。

「全く寒い。これちや伯林よりも寒いね。何しろ建物か建物だから。」彼は、窓から天井を一寸見廻して大袈裟に顔をしかめて見せた。左の眼を全く無い位に細くしたので血色のいゝ顔は一層子供らしくなつた。眼と眉との離れ工合が話につれて動いた。右と左の眉が段々に見えるやうに高くなつたり下がつたりした。それは彼の表情に一層好意ある親切な感じを與へた。彼は恰も眼と

眉で、(君及び君のお母さんに就いては總て承知してる、氣の毒だ、何れも全く氣の毒だ。何も云ふな、恥かしがるな。一切は僕がこの胸の中に承知してる)と俊一に語つてるやうだつた。

「……母が色々お世話になりました。よくお禮を申上げるやうに言ひつかつて参りました。」

「いや〜。で君はかへつた？」

「え。」

「それがいゝ、それがいゝよ。決して禮なんか云はないがいゝ、で歸つたと、それがいゝ。」若主人はその話題は早く避け度いやうに困惑してゐた、だが直ぐ微笑にかへつた。「で、君は今後どんな方針を取るね、もう一度勉強してみたらどうだ。」

その時女中が紅茶の道具を運んで來た。で、俊一は口の中で「はア。」と云つたさきだつた。

「何か、さうだね、正月だから餅は上げない方がいゝだらう、ね君。正月だから餅はいけないと云ふと少し矛盾してるかな。まアお菓子に果物の方がいゝ、君もさうだらう！」斯う笑顔で云はれると俊一も微笑せざるを得なくなつた、命令を待つて立つてる女中も微笑んだ。

「さア！」女中が去つてから紅茶をすゝめられた。上等な紅茶の香とレモンの匂ひが心持ちよく

漂つた。

「獨逸も減茶減茶だね、ひどくやられた。」湯澤氏は紅茶を啜りながら、机上に散らばつてゐる、獨逸の雑誌や新聞に目をやつた。「塊地利は殊にひどい、ね、あのウイーンの市街がさ、餓死しかけてる人間でウヨ／＼してると云ふんだから。露西亞も苦んでる……だが、決して獨逸は減びない。あの民族は決して減びない。何より、ゲーテやシラーは永遠だらうぢやないか、永遠に彼等は生きてる、ニーチェもある、それからワグナー、ベエトーベンがある、ね。」彼は一寸眼を上げて壁のベエトーベンの額を見た。

菓子や果物が運ばれて、湯澤氏は殆んど一人で喋りつゞけた、俊一は合槌を打つてゐる丈けだが、思はず引き入れられるやうに相手は面白く話した。

菓子皿も果物の食べかすも投げ出して二人は煖爐に近寄つてゐた。窓硝子の外では軒から水滴が光つてチタ／＼と落ちた。

「で、又先刻の話だが、どうするね？ 今後は。」

「私は働いて母を養つて行き度いと考へてますが。」

「働く？ それよりもつと勉強したらどうだらう、君の頭では惜しい。」

「學校へは決して行かない積りです。働きます、私はよく考へてみたのですが……」

「ウム。君だからよく考へてから決心したのではあらうか？ 働くと言つてどうするね？」

「労働でも何でもします、これから働く口を探さうと思つてます。」

「労働と。それもいゝ。何をしていゝ。然し今更鶴嘴を取つて土方や坑夫の眞似も出来まいぢやないか、何か仕事をして勉強する餘裕があつた方がいゝね。」

「え……」

「眞個に何でもする氣なんだね、それもいゝ、だが惜しいな……えゝと、何かいゝ仕事があるまいか？」

「何かお心當りがありませんでせうか？」

「えゝと、待ち給へ。」湯澤氏は一寸眼を閉ぢるやうな表情を作つた。「製紙會社はどうだね、それからあのT製紙會社、北五番町の。此處からは少し遠いが、高が知れた仙臺市内だ。それにあの會社はなか／＼大きいし、しつかりもしてゐる、先づ將來有望の方だらう。僕はあの會社の親方の××

つて男をよく知つてる、實は僕もあの會社とはまんざら關係のないわけでもない。人があつてもいゝやうな話をしてゐたよ。」

「さうですか、あゝ云ふところなら喜んで働きます。」

「君が行つて、辛抱してればドシ／＼上にも昇れるさ。然し惜しいな、君が。もつと學校をやつてはどうだね。」

「いや、學校は斷然やりません、これは現在母を養はねばならぬため許りでなく、假令私に何の責任がなくても、金があつてもやらない積りで居ります。」

「ウム、君がさう云ふからには深い考へがあつての事だらう。尤も學校なんか詰らないがね、現に僕だつて大學に行くのと直ぐ止して了つた。それは他事として、製紙會社へ行つて見るか。」

「もしお世話を願はればこの上ないです。」

「ぢや兎に角社長に會つて見給へ。今紹介狀を書いて上げる。」湯澤氏は手を拍つて女中を呼び、硯と紙を取り寄せた。彼は卽座に非常に達者な筆で、長い丁寧な紹介狀を書いて呉れた。「ぢや斯う書いたからね、兎に角行つて見給へ、えゝと、四五日過ぎがいゝね、今はあの男家にゐないか

も分らない。知つてるね？ X Xの家、北三番町の？」

「はッ。いろ／＼どうも有難う御座いました。」俊一は丁寧に禮を云つた。

「少しも、禮なんか云はなくていゝ。」

間もなく俊一は辭して出ようとした。

「さう、又遊びに来給へ。遠慮なしに始終來給へ。」二人が立ち上つて、俊一の部屋を出ようとした時、湯澤氏は見送りながら云つた。「君は英語は達者だね？」

「いゝえ、駄目です。」

「そんな事はない。T學院の出身だもの。それに君は首席で卒業したんぢやないか。全く惜しいな。實は英語に關する事でお願ひする折があるかも知れないよ。勿論夜でも片手間にやれるやうな仕事だが。」

「は、もし出來ます事なら。」

「堅くは約束出來ないが。先づ度々遊びに来給へ、失敬。」

俊一は言葉よりも心の中で強く感謝しながら外に出た。彼は非常に喜んだ。働く事は金を得ら

れる事より彼自らが自信を得らるゝやうな氣がするので嬉しかつた。徒食してゐるのは人間として濟まない事である。それが働き得るのだ。彼は自らの力を信じ得たやうに嬉しかつた。

四日過ぎて彼は製紙會社の社長に會つた。物々しく一時間も話し合つて、初めは月給が安いのと、職工とも交渉があるのを承知ならばと雇はれる事に決定した。會社は正月は職工が動かないので二十日から仕事を始めるのだと聞いて、彼は道々その怠惰なのに先づ驚きながら、然しいよ働き得るのを喜んで歸つた。湯澤氏には何より先に禮を云つて來た。母にも聞かした。

「お前が働くの、さうか、お前が働いて呉れるのすか。」母は矢張り失神してゐる人のやうな元氣のない聲を出して、別に表情には強い變化がなかつた。お勢は歸つた夜中に彼の枕元に坐つて出したやうな聲も言葉も二度と口にのぼせなかつた。彼女には何の熱もなかつた。彼はそれに氣がつく毎にひやりとした。

「あ、俊一、手紙が來て居りました。」母が狐のやうな無表情な顔をして一通の手紙を持つて來た。(誰からだらう?) 彼は重い封筒を受取つた。山の寺の住所が書いてあるのが廻つて來たのであ

つた。手紙は東京にゐる傳三から來たのだ。

## 三十七

——俊ちゃん、君は一體何をしてゐたのだ?! 今迄何をしてゐたのだ?! 僕は聲を限りに斯う叫ぶ。と云つて君自身の生活を非難する氣は毛頭ない、何をしてゐたと云ふのは君と民子さんの關係に就いてである。斯う云へば、君は、『僕と民子さんと何等關係あるべき理由がない。』と答へるだらう、然しそれは僕の有り得べき理論に依れば大なる誤りである。

それは斯うだ。だがその前に話が飛ぶ。僕自身の近來の生活を云はねばならぬ。敢て生活と云ふ、僕は生活してゐるのだ。世の大部分の人々は生活してないのだ。唯蠢動し、押し流され、駆け廻つてゐるに過ぎない。僕は生活してると廣言する。先づそれを喜んで欲しい。

東京へ來ての二週間は『露西亞シャツ』と飲み廻つた。『露西亞シャツ』とは人物の名なり、君の知らぬ人、又知る必要もなし、兎に角いゝ男である。だが僕は矢張り一人にならなくては生きて

ゐられない男だ、一日に數時間でもいゝ一人にならねば堪まらない、狭い部屋でゴタ／＼寝轉んでるのは到底堪へられない。逃げ出した。酒は眞個のところ好までない、だから餘り飲まないが、好きなら飲むだらうから自慢にもならない。子供の折、親爺は飲み友達を奥座敷に連れ込んでお互にお世辭の云ひつこをして朝からぶつ通しチビリ／＼飲んで上機嫌だつたのを見た。親爺は盃を上げて柱の短冊を自慢するのだ。短冊は古い、『元旦やまた一年の飲みはじめ』——曾祖父の句だ、曾祖父、祖父、父、飲みつゞけた。お蔭で僕に因果がかたまつた。全くの精神薄弱者だ！何しろ、僕の兄貴で九代目の元祿の昔からの酒屋なのだ。これは僕をして屢々『絶望』に導く、『……また一年の飲みはじめ』は曾祖父の人生觀であり、祖父のそれであり、而して父のそれなのだ。而して僕のそれであるべきか？『絶望』と満津緒の影は僕をしてフラ／＼と飲ましめる。だから折々うんと飲む。だがビールだ。僕は淡ビールより寧ろ黒ビールを好む。

飲むためには市街に出る。總てが間に合はせの東京市街に出る。人々は膝をくの字に曲げて間に合はせの狭い街路を間に合はせに歩いてゐる。間に合はせの食物しか取らない彼等は、あの顔色をばづかしげもなく日光にさらしてゐるのだ。盜賊のやうな眼か阿呆のやうにあいた口、彼等は間

に合はせの小屋の家に這ふやうに入つて住んでゐる。いつも何をするにも中腰だ。シャンと二本の足を地上に突つ張つて見た事があるか？！

僕は市街からかへる。その時だ、僕は身も世もなく全く絶對絶命の淋しさに、粘々する蜘蛛の糸でからみ上げられたやうに動きが取れなく捕り押へられて了ふ。そののせり出づる道を唯一つ発見した。それは遠慮會釋なしにほんとの僕の姿を見詰めるのだ！ほんとの僕！それと顔をつき合はせるのは何よりつらい。この僕のほんとの姿だ、ならう事なら絹もきせたい、美しい幻の花で飾り上げたい、假面もかぶせて置きたい。實は今迄さうして置き、今も多くはさうしてゐる。だが僕は努力した。俊ちゃん、君に感謝せねばならぬ、その状態に導かるゝ緒はいつも君を思ふ事に依るのだ。『後なる者は先になるべし』だ！遅ればせながら僕は走り出したのだ。これの度重なる毎に、僕は僕を得て行く。僕は今、東京の西郊落合村に住んでゐる。外に飛び出すのだ、其處は冬枯れの武藏野である。『花婿の來らん時、燈火をともし待て。』

『露西亞シャツ』の宿からこの落合村に來た。或る人のアトリーを借りたのだ。實は、留守番である。或は番犬代用かも知れぬ。何故と云つて赤子を除く外はこの家の人々は皆女だ。主人は佛蘭



西に行つてるのだ。移つた日まだ三十にならぬ奥さんからもてなされた。彼女は艶がある、よく笑ひ、よく話す。そして近代の藝術の話がよく出来るのだ。つまり僕は危地に陥らうとした。そのまゝ話し合つたら、言葉を皆まで云はず互に藝術を理解し合つてるやうな話をしたら、その轉んで行く先は何だ？ 分りきつた話だ。或は心にもない言葉に又言葉を重ねて、『妾は貴方を愛してますわ。』『あなたは僕の生命です。』と云ふは、めになつたかも知れぬ。佛蘭西に宣言してやる、所謂三角關係が成立する……所が、僕は『これは危い。』と思ふ前に、『此奴たれか者だ』と感じてしまつた。彼女の蕩かすやうな眼を見る前に、胸の底が透いて見えて了つた。何たる幸福ぞ！ 彼女の『理解』は實は借り物の請け賣りだ。而も墮趣味に陥つてる。藝術は生命の表現だ。趣味になんか陥つて堪るか！ ましてや實は肉と肉とが近寄るための甘え合つた男女間の玩弄物、中間體になんかなつて堪るか！ 僕は遠慮なしのことを云つた。奥さんはべそをかいて、機嫌を悪くした。それ以來僕はどうも彼女の苦手になる。僕も、もし反對の場合だつたら、氣に入つて氣に入つて賞讃の的にならうと思はる。彼女の諸點が、逆に何もかも氣に喰はない。實際君が考へたらこれは僕にしては大出來であり、或は嘘だと思ふだらう。僕にしても我ながら大出來なのだ。こ

れがきつかけに、僕はほんとの自分を見詰め得られるやうになつたとも云へる、然し告白すれば、僕とこの奥さんとの間に實はチラリ／＼と第三者が現はれたのだ。それも女性だ。今にして思へばその折救はれたのはその女のためかも知れぬ。然し實は取るにたらない女性だつたのではあるが。その女の名をおしんと云ふ。後でかく。

奥さんに八つになる女の子がある。その子が斯う云つた。『ね、母さんが云つてるわ、萩原さんは高慢ちきで、無愛想で、お行儀が悪い。アトリーの中でも煙草をやたら喫つてはベツ／＼と唾を吐く。御飯の時もそれはお行儀が悪い。仙臺者だからあゝだつて。でもね、どつか鷹揚なお上品なところもあるにはあるつて云つてたわ……』勝手にしやがれ！

この手紙は元旦の夜書いてるのだ、母屋では若い男女が寄り集つて、おきまりのカルタ會をやつてキン／＼聲を出してるのが幽かに聞える。今夜夜通しでやるのださうだ。窓を閉めきつたアトリーの中は静かだ。火鉢に足を載せ、大きな卓子に向つてこれを書いている。卓子の上も床の上も亂雑だ。部屋の間にはベッドが待つてゐる。だが僕は眠くない。まだ／＼書く事がある。この部屋こそ僕の世界だ。今頃は雪が降つたらうと思はれる寒い仙臺を思ひながら書いてゐる。

僕は常に君と民子さんを結びつけて考へてゐた。今頃は随分親しくなつたらうと思ひ、本気で蔭ながら祝福してゐた——これ迄が僕の東京の生活なのだ。ところが民子さんが二度現はれた、暮と、そして今日の元日と。僕は全く吃驚したのだ。

で、君は一體何をしてゐたのだと云ふんだ。僕は、民子さんは實は君をより強く愛してゐるから、僕が引つ込むのが當然だと考へたのではない、そんな氣の抜けたやうな人道主義者ではない積りだ。眞に心に省みて民子さんを愛してゐるなら僕は僕ながら君と闘ふかも知れぬ。要點は、君が「民子」なる女性を君の心の中にまだ發見しないのだ。それが齒痒い。僕は民子さんを尊敬してゐる。だがどうしてもびつたりと愛してはゐないのだ。つまり戀してはゐないのだ。よく／＼自分の本心に問うて確めたのだ。これは致し方ない。

それに何故彼女を加藤になんか紹介したんだ？ 尤もこれは僕が悪い。君等二人に住所を知らせなかつたから、彼女がどこ迄も僕を探し求めるとなれば君が加藤に依つて僕の居所を知らしめるのは當然だ。然し事實の問題としてこれは甚だ危ない。僕は今その點では躍氣になつてゐる。何故と云つて民子さんはあれで恐ろしい情熱を胸の奥深く秘めてゐる人だ。加藤は近頃はやる似而非

人道主義者なのだ。尤も本人は自ら本物と思つてゐるらしいが、僕は甚だいゝ氣になつてこんな事を云ふやうに見えるか知れないが、實は眞剣なのだ。最も始末の悪いのは加藤のやうな男だ。彼奴は實は酸っぱいのだが磨きをかけた赤林檎のやうな奴だ、而も店頭で瓦斯の光に照らされてゐるのだ、文明の光に照らされてテカ／＼光る事おびたしい。それに加藤の宿と民子さんの家は同じ小石川で二丁とは離れてゐない。民子さんの母は今の日本の母親としては最高の教育があり、而して頗る開つ放しな派手好きの人だ。夫の立身は自分の里親のお蔭だと位しか思つてない。民子さんの父は知事で終るかと思つたら中央に戻つて來た活動家だ。常に家を外にしてゐる。民子さんは父母を愛してゐない。それは彼女も告白してゐる。家庭は開つ放しだ。其處に加藤の如き文明の光にテカ／＼光つてゐる奴が出入りするのには甚だ危険だ。而も彼は大學生である。民子さんは熱情家だ。熱情家は全然Aをも自ら求めるAと無理に合はせようとする。而も彼女は現在の状態である。君とは全く親しくしてなかつたと云ふ。僕は離れる。彼女は戀をせずにはゐられない人なのだ。彼女は處女である、然し肉體を持つ人だ。受身であれ漠然であれ、肉體的にも何か要求がある。それが甚だ露骨な言葉だと云ふなら、加藤の如き者と言葉に言葉が重なり、眼の閃きが動

くと、遂のつびきならなく其處に進み行くと換言しよう。今日にも加藤から「君の愛人である民子さんを僕は愛する。人間として致し方ない。僕は愛すると宣言する。そして僕はキスをした、告白して置く。」とでも云つて來やしないかとハラ／＼してゐるのだ。

僕は今日委しく民子さんに話して上げた。だから大丈夫であるとは思つてゐる。

「加藤さんは一生をトルストイの研究に捧げるんですつて。それから妾を、あなたは教會堂のオルガンのやうな女だと云つてなさいましたが、眞個に妾さうでせうか？」彼女は斯う云ふのだ。而も彼女は頗る満足の體なのだ。僕は憤慨した。何故と云つて、加藤は偶然云つたのであらうが、正に民子さんの胸中の『趣味』の糸をうまく搔き鳴らしたのだ。熱情家の彼女は對稱がなくてあせつてゐる。その苦しみの遣り場は正に『教會堂のオルガン』だ。彼女は靜寂を求める。尼寺の如き生活は彼女の趣味である。強ひて樂器に比喻を求むるなら彼女はピアノだ。オルガンにはなり得ない。屋根裏部屋で靈感に打たれた人に弾き鳴らされる、ピンと響くピアノだ！

何よりも民子さんは民子さんだ。加藤は既にそんな遊戯を始めやがつた。彼女と一場の戀の遊戯を打たうとしてやがる。加藤の如きには、千代紙を疊んで少し新しい空氣を吹き込んだやうな

女が丁度いゝのだ。それとも水を入れ過ぎて搗いた餅のやうな女が丁度いゝのだ。そんな女は今の日本に満ち充ちてゐる。鷲鼻の威勢のいゝ女は加藤の方からも避けるだらう。民子さん如きは彼の傍にも置かるべきでない。彼女の眼は常に遠くを見てゐるのだ。（これ等及び次の言葉は、話の中に皆民子さんに聞かして上げた）彼女は戀は一筋にやる信條で僕に來る。唯信條あるのみなのだ。僕の姿は消えてゐる。彼女の求むるAは實は彼女自身の胸中にあるのだ。この信條は成程ロマンティックである。箱入り娘、會堂のオルガンの如き女、男嫌ひの藝者、それらが所謂戀を一筋にやつて、一人の男を思ひ通したら、これより美しいロマンスはないだらう。然しそれは嘘だ、表面の現はれだ、眞に生きてゐる人間ではない。戀は一筋とはそれとは全く別である。自らの胸の聲に従ふのだ。だから相手は變つてもいゝ、唯常に眞の誠實性<sup>シンシヤチ</sup>を堅く持してゐるものでなければならぬ。これこそ至難なのだ。彼女はAを求むる、僕や加藤はA' A'' ……だ。Aは彼女の胸にある。眞の誠實性を持つて永久的に結び得るのは二人が遠くを見得る人々なるに限られてゐる。即ち常に靈魂の糧を求めずには如何にしても生きてゐられぬ人でなければならぬ。Aは君の胸にもある。（これだけは彼女に明ら様に云はぬ、暗示した丈けだ）而も彼女と君とはテムペラメントに

於ても合致し得る。僕は駄目だ。その點が彼女とピッタリしないのだ。君に強ひはしない、唯氣がつかないのか？ と云ふのだ！ 君は一體何をしてゐたのだ！

彼女は加藤と遊戯なんか始めたら最後、心が末梢神経に分裂するのだ、或は初等平面幾何の定理のやうな哲學を並べる女になつて了ふ。

僕も幾何の定理のやうな理窟を云つたやうだ。だが眞に感じた以外は云はない積りだ。あの僕がこれ丈けでも自信あるらしい事を云ひ得るやうになつたのは君にも喜んで貰ひたい。僕はその事のみでも嬉しい。眞に生活してゐるやうなのだ！

君の生活の事を云ふ。矢張り山にゐるのか？ そんな氣がする、決して非難するのではない。君の山の生活を思ふと、僕の頭には『……コロリと一つの石に化しました』と云ふエピソードが浮ぶ。怒つてはいけないよ。そんなエピソードが何かのお伽噺か傳説か、それとも聖者の傳記になつたかしら？ ないとすれば僕の頭に浮んだエピソードのみの物語だ。然し君は今はまだ山にゐるとしても、いつかは野に下る人だ。僕は信じてゐる。既に君の力は僕の上に非常な獎勵となつてゐる。君のやうな友人を持つてゐるのは僕は嬉しいのだ。

民子さんは正月十日休暇が終れば早々に仙臺に戻るであらう。

おしんは僕の戀人である！

曾て女は僕の妻となるものでなければならなかつた。將來自分の細君になるべき女、これ以外の女は僕の眼中になかつた。女に會ふ毎に先づその女を自分の細君となるべき人として考へ、觀察し、否缺點をも或る完全に迄無理にひき上げたものだ。そんな女の一舉手一投足を非常な意味があるものとして考へたものだ。あの髪に手をやりながら微笑んだのは何を意味してゐるだらう？ 『私、讚美歌の二百五十番が大好き。萩原さんはどれがお好き？』 『私代數は大嫌い、私は數學は駄目。』 『……でもね、あれは、眞個に詩的だわ。』 斯う女共が云ふのは何を意味してゐるだらう？ 一生懸命自分に都合いゝやうに解釋したのだ。つまり自惚れたのだ。極く普通にはこれを戀と云ふやうだ。僕には次の時代が來た。それがいつ頃から來たかは君は知つてゐる筈だ。どの女をも性慾満足の對稱としてのみ見るやうになつた。今にして思へば恐ろしい、ソツとする。だがこれは中取り去る様子もない。相手次第に依る。その意味では僕は民子さんを汚した事はないやうだ。だが加藤は心の中で散々彼女を汚してゐる。僕が躍氣になるのは當り前だらう。彼如きは如何なる

美妙な言葉、人生の味に徹したやうな言葉を述べるとも唯口先きである、漠然ではあらう、漠然ではあるが行きつく先に唯女を抱く事のみを考へてるのだ。畜生！然しこれは加藤に限らぬ、僕にしても相手次第だ。僕は弱い。これが我ながら恐しい。女を見て色慾を起すのは罪である。基督は如何に女に鋭敏なりしよ！彼の苦しみは分る。

三四日前、民子さんが訪れて呉れて停車場迄見送つた。僕はその足で市街に出た。年の暮の銀座に出たのだ。フラ／＼と美しい女の後を追つた。話しかけて見たくなつた。だが他人である。それが悲しさに酒を呑んだ。『民子さんと君の關係』に就いても憤慨した積りで大いに呑んだ。カツフェーを幾軒飲み廻つたらう。いつの間にポケットに葉巻を七八本ねぢ込んでゐた。僕は恐しく煙草好きだ。だが寒い郊外の道をトボ／＼かへつてゐたのだ。星がいやに冷たく光つてる。酔がさめかけて寒さが身に沁むやうになつた。僕はアトリーにかへつてゐた。

『萩原さんの馬鹿！又飲んだね。』おしんは僕がいゝ氣持ちでボカ／＼喫つてゐた葉巻をいきなり取り上げ、眞赤になつて怒つて床の上にふみにじつた。「早く寝な！」彼女は斯う叫んで立ち去つた。彼女は僕の戀人である。十七歳だ。見掛けも十七歳だが、よく見ると可なり背が高い。手

と足が大きい。身體は細い。だが筋肉は非常に堅くて而も弾力に富んでゐる。そして膚は小麦色或は狐色と云ふ奴だ。顔も長い。殊に鼻梁が長い。そして眼は澄んでゐる。だがこれもよく見ての事だ。何故と云つて彼女は下女だ。普通は誰しも『下女』として見逃がして了ふ。それ程目立たないのだ。だが、齒は、彼女の小粒な實によく揃つた齒はまるで眞珠を並べたやうで而も健康そのものだ。彼女は袖をまくし上げて働く。細い堅い長い腕だ。指も恐しく長い。然し働く事によつて指先は圓く堅くふくらんでゐる。壁に這つてる鳶の足を見た事があるか、あの通りの手だ。彼女は御用聞きの小僧を叱り飛ばす。一言で、二言或は三言云ふ。だがそれ以上喋らない。今から二年餘前、佛蘭西にゐるこの家の主人が伊豆の海岸から彼女を見るに見兼ねて拾ひ上げて來たのだ。彼女は孤兒だ。當時伯父に虐待されてゐたのだ。彼女は仙臺式の女だ。但しあんなに鼻ツぱしが強い許りで實はだらしがないのではない。實によく黙つて或は僕が教へた歌を歌ひながら働く。仙臺式と云ふのはたれかを見極める事が實に鋭敏なのだ。彼女は人を語るに、『好きだ！』『嫌ひだ！』のいづれかしか云はない。加藤は折々遊びに來るが、『あの加藤さんは嫌ひだ。ニヤニヤしてやがつて屹度碌でなしだ！』彼女はちやんと見抜いてゐる。仙臺女なら『あの加藤ツて奴

たれか者だ！』と云ふところだ。『露西亞シャツ』の事は「嫌ひではないが、あの人は馬鹿だ！』と云ふ。民子さんはいゝ立派な奥様になるさうだ、これも全くなのだ。つまり彼女は犬の如く鋭敏だ、毒物と然らざるものとを即座に嗅ぎ分ける。決して豚ではない。豚は眞球を踏みこむ。但し僕の事を曾て好きとも嫌ひとも云つた事がない。唯僕をだん袋だと云ふ。これは當つてゐる。僕は氣に入つた古洋服を買つて来て着てゐる、正にだん袋なのだ。朝寝をしてゐればたゞ起きられる。だが僕の云ふ事はいつの間にかちやんとして置く。折々袖をまくし上げた濡れ手の儘、アトリーに來て僕の『仕事』を後からヂツと見てゐる、僕はその眼を自分の後頭から頬にかけてビリビリ感じるのだ。朝、顔を洗ふ時もこれを感じる。だがその時は少し感じが違ふ、つまり温みがない。その理由はわかつた。僕が齒磨粉を無性に飛ばすのが素的に氣になるのださうだ。僕は彼女が好きだ。折々は無性に可愛くなる。つい手を出したくなる。だが彼女の細長い指の手を持つてやる位だ。後は僕の心の中で何物かが闘ひ合ふ。そして僕は勝利を得る。それ以上手は出さぬ。何故と云つて僕は彼女と結婚するかも知れないのだ！ 勿論年數はある。だが僕も結婚する方がいゝにきまつてゐる。結婚は肉によつてのみ、結ぶものであるまいさ。ればと云つて知識に依つてのみ、結

ぶものでもあるまい。僕も少し年を取れば獨り身であるのは悪いにきまつてゐる。だから結婚する。それ迄にこの僕をたゞき上げる。彼女をもそのまゝを持って成長するやう、僕が温め、見守る。實はこれから僕の眞の人生の始まりであらう。人生の出發點に立つたのだ。僕は彼女が孤兒なるが故に憐むのでは決してない。何故と云つて彼女は憐んだりされなくともいゝ性の女だ！ 君は冬枯れの小枝、殊に武藏野のそれを見た事があるか？ あの小枝を見詰めよ、と云ひたい。君は十分仙臺の山で見てるには相違ないが、素枯れた小枝はビリ／＼と顫へて來る、素枯れても、自然の形の小枝は内より湧く生命の力にビリ／＼顫へてゐる。一本の芽生えした草を見た事があるか、假令踏みにじられようとそれは如何に強き生命の力に充ち満ちてゐるか！ おしんはそれだ、素枯れた小枝とも一本の草とも云へる。それは目立たなくとも眞の生命と力に満ち溢れてゐる。彼女は僕の戀人だ！ さよなら、お休み――

俊一より傳三へ——お手紙心から嬉しく拜見。何より先に僕は多分民子さんが第一回に君を訪問した日頃、僕の母の許にかへつたのを告げねばならぬ。僕はかへつたのだ。だがそれ以上云ふ事は今は出来ない。次に僕は働く、それも定つた。働く事は自分に自信を興ふるであらう！それが何より嬉しい。君も知つてるだらう、僕の家の家主の湯澤氏の好意によつてT製紙會社に入つて働く事になつた。多くの人々は殆んど無意識で消費してる、だが供給が止まれば生活は直ちに不便を來す、だから僕は働くのだ、生産するのだ。それきりである。然し働きは自分に力と自信を興ふるであらう。湯澤氏は僕には不可思議だ。實にいゝ人である。然し君の所謂生活してゐる人とは云へぬやうだ。だから僕はこの數日何とも云へない不可思議と内心の支離滅裂を感じてゐる。世の多くの人々より見れば同氏は立派な人に相違ない。だが僕は嚴正には賛成出来ない。それにも拘らずいゝ人だ。怒らないで呉れ給へ、僕はせめて君が湯澤氏の境地にでも達して呉れたらとひそかに思つてゐたのだ。何たる僕の誤りであらう！君はズツと先に駆け抜けてゐた。君は君の心を發掘してゐた。僕の喜びは計り知られない。僕は今君の魂に面と向つてるやうで恥かしくて堪らない。君に許しを乞はねばならない。

君の云ふ事は總て眞實だ實は。癢に觸る程眞實である。何故癢に觸るだらう！僕の眞實と思つてる外に君の眞實もある。眞實に二つある筈がない。僕の心の中で君と僕と對立した。而して何れも明らかに眞實と思はれる。二つ對立するのが氣になる。然しよく考へて見ると一つの人生を君と僕と二つの立場から見えてゐるのだ。つまりテムベラメントが異なる所であらう、それ丈に僕は豊富にされたのを感じる。

君は僕に何をしてゐたのだと云ふ。これに唯驚くしかない。僕は母の處にかへつたのだ。それ丈に云へば君は了解して呉れる筈ではあるまいか。卑怯のやうだが僕は之れ以上云ふのは非常に苦痛である。僕は身體丈は母の處にかへつた。然しまだかへり切れずにゐるのだ。僕の人生の出発點は茲にある。この解決にある。僕は實を云へば民子さんが好きである。尊敬もしてる。僕は僕なりに彼女の輪郭もつかめてゐる。だが人生には戀愛以上になさねばならぬ事がありはしまいか。達しねばならぬもの、捉へねばならぬものがある。そのためには戀愛をも捨てねばならぬ折さへあると思ふ。僕は全然戀愛を否定するのではない、然し戀愛が無上であり絶對であるとは云はれぬ。

君とおしんさんを祝福する。實に羨ましい位嬉しい。君は幸福だと思ふ、眞個に羨ましい、僕は心から羨しいのだ。おしんさんが君をだん袋だと云つた時の二人が眼に見えるやうだ。君がだん袋になつた時こそ、君は益々透明に、益々朗らかななる、僕は羨ましい。君の心の苦しみも、一つ一つ手に取るやうに僕には了解出来る、それは僕に取つて獎勵である。僕こそ君のやうな友人を持つてるのが嬉しい。前途を思ふとゾツとする程暗く冷たく思はれて遣りやうのない淋しさに捉へらるゝ事がある。僕は一人ぼつちだと嘆くまいと思つても何時の間にかさう感じてゐる。其處に君の手紙に接したのだ。僕は山に一人住んでゐても少しも安心がなかつた。今更君の云ふ押し流されるやうな生活は尙出来ない。唯逃れる血路は人のために黙つて働く事にあるらしい。僕は今その門出に立たうとしてゐるのである。然し襲ふものがある、冷氣のやうに僕の心を襲ふものがある。先づ最も自分に近いものを愛し切らねばならぬ。僕の前には青白い母親が、自分を育てるために犠牲になつた母親が坐つてゐる……僕はこれ以上書く事が出来ないのだ。許して呉れ。これも書くのではなかつた。だが君の友情の嬉しさについて書いて了つた。僕は唯々、母、君、總ての人々の前に頭を垂れる、而して裁斷を仰ぐ、何と云ふ力ない、弱い自分であらう！ でも

頭を垂れるしかないのだ。――

俊一は夕食後、手紙を懐に入れて外に出た。黄昏時から遽かに襲ふ寒氣に道路の雪はカン／＼に固まつて、用心して歩かないと足はツル／＼滑つた。彼は夜の急行車に乗せようと思つて、餘り遠くはない停車場に向つた。右手近い線路の上のシグナルには灯が一つ寒さうに光つてゐた。瓦斯の光りが洩れて来る。口から吐く息が幽かに白く見えた。下の雪は無限に熱を吸ふやうに凍み固まつて行つた。空を見上げた、星が細かく冷たく、小さな強い光を放つてきらめいてゐた。(おお星、星！)彼は思はず冬の星座を見究めるやうにヂツと空を見上げた。

停車場の明るい構内に側目もふらず這入つて、手紙を投函した。その時彼は驚いて眼を見張つた。直ぐ前に黒木綿の紋附羽織を着た十三四の盲目の子供が立つてゐた。附近には餘り人はゐなかつた。

「おすーすー」俊一は低くはあるが強い聲を出した。「一寸此方へ来い。」

「……………」卵の白味がかゝつたやうな眼は明らかに幾分は見えるのだ。俊一に軽く肩に手をかけられたまゝ彼は歩いた。構内を出て外側の薄暗い處に來た。



「お前、逃げ出して来たな？」

「えッ、何の事ですか？」如何にもとぼけた聲を出した。

「お前俺が誰か分らないか？ 見えないのか？」俊一は相手が見えて知ってるのを分つてるので思はず鋭い聲になった。

「少しも分りません。」

「ぢや、俺の聲を覚えてゐないか？ かへれ、かへれ。こんな寒い夜逃げてどうする？ 俺が山迄行つてやるからかへれ。」

「あーあ、あの書生さん、小畑さんですか？ あたい逃げ出して来たんぢやありません。もう彼處を出されたんです。」

「眞個か？」

「え、眞個です。東京へかへつてもいゝと云はれたんです。つまりその許されたんです。あたいのお母さんが東京で大病なんです。」

「眞個か？」

「えゝ、眞個です、眞個です。あたい嘘なんか云ひません。」彼の聲は頓へた。

「さうか、そんなら此處で一待て。」

「あゝあゝ、小畑さん、何處へ行くんです？」

「大丈夫、大丈夫……」その聲に巡査に知らせるのではない意を含めて彼は賣店に急いだ。直ぐ眼に入つた板のチョコレートを二つ買つて戻つた。

「そら、お前にやる、お母さんが大病なのは眞個か？」

「眞個です、眞個です……これは何ですか？」

「ウム、紙をむいて食べるんだよ。」

子供はいきなり手探りに菓子の包紙をむいて口に入れた。

「チョコレートですね、どうもあたい達の口には合ひません。」さう云ひながら、禮も云はずに急いで食つた。

「お前夕飯を食べないな。……お前、かへれ、歸つた方がいゝぞ。」

「何故ですか？ だつてお母さんが大病ぢやありませんか？」

「……さうか。」俊一は苦い顔をした。それ以上無理に感化院にかへす事も出来なかつた。「さうか、お母さんを大切にしろ。だが……よし、さよなら。」彼は急いで其處を去つて了つた。交番の前に来た頃、彼はもう一度引き返して、そつと探偵でもあるかのやうに構内に戻つた。

盲目の子供は改札口の方に近づいてゐた。彼は手探りするやうに、今は閉ぢてある改札口に身を寄せて、その戸の下の横木に兩足を載せ、上身をプラットホームの方にのし出し、眼のあいてる人なら到底なし得ないやうな危なかしい姿勢で耳を澄ました。俊一は數歩後から見えてゐた。

「オイ辨當屋さん。」子供は辨當屋を呼び寄せた。次に手探りで懷の奥深くから財布を引き出し、金を出して上等の辨當を買つた。釣錢を眼の近くに寄せて一生懸命勘定してゐるのだ。彼は辨當を手にし、一二等待合室に這入り、隅のベンチに腰かけて、手探りで辨當を開いた。俊一は其處迄見究めて、此度は眞實に急いで構内を出て了つた。

(俺は依然として無力だ) 彼は暗い雪道を歩きながら頭を垂れた。心は暗くなつた。(人間は眞實に信じ得べきものだらうか? 眞に悪が絶え亡びる可能性さへあり得るだらうか? あゝ俺が捉へ得たと思つた信念は何處へ行つた! あんな盲目の子が知れ切つた嘘を云つて俺を欺くの

だ。俺は彼奴の心を突き刺す事が出来ないのだ……あの齋藤はどうしてゐるだらう? 齋藤、俺はお前が羨ましい……)

靜かに障子をひいた彼は又佛壇の前に坐つてゐる母を見出した。彼の胸はギクリとした。だがいつもそれに就いてはどうしても母に問ふ氣になれず、また彼が母の端坐してゐるのを見てると母親に意識させる事さへ恐ろしかつた。彼は狭い暗い隅の茶箱の上に腰かけて了つた。

(總て事實は事實として存する。だが唯さう云つて見逃されない、唯さう觀じ來り觀じ去る事はどうしても出来ない。これを愛し、あれを憎む。だから俺は苦しい。どうすればいゝのか? 神様、どうして私を斯う苦しめなされるのです。これがあなたの試練ですか? 試練ですか? ……あの傳ちやんは幸福な男だ。何となく減茶苦茶だが朗らかだ。何故あゝなのだらう? 俺は一人ぼつちだ、どうしても一人ぼつちだ……)

ぼかつと彼の胸に、今年の五月鈴蘭が咲いた頃臺の原で見た民子の耀く眼が浮んだ。民子の姿が眼の前に盛り上つて來た。丁度一粒の種子が、彼の胸の中に落ちて芽生えし、成長したやうだつた。

（あの時から俺はあの人を愛してゐたのだらうか、傳ちゃん云ふ事は眞實だらうか、あの人  
俺を愛してゐる……お、さうだ、あの人がいつか「相手が自分自身の魂のやうに胸に映る」と云つ  
た。あの女こそ戀が出来る人に相違ない……俺は過つてゐるかしら？ 過つた道に踏み入つてゐるか  
しら？ あの人こそ、自分に力を與へ勵まし慰めて呉れるに相違ない。自分の進む道に邪魔にな  
らないに相違ない。あの方は俺よりも尊いものを握つてゐる、もつと尊い何物かを握つてゐる……俺  
はこれで俺の心の底の底迄掘り當てたのかしら？ 發掘し盡したらうか、否もつとある、これを  
愛し、あれを憎む。俺はもつと突き進まねばならぬ、もつと何事かをなさねばならない！）

## 三十九

三日目の宵、俊一は再び傳三から手紙を受取つた。

——今日と云ふ今日は何と云ふ日だらう。東京の一月は空氣が乾いてゐる。麗かな日の光が一面  
に射してゐる。窓硝子の中から見れば、其處らに蜂が飛んでやしないかとさへ思はれる。午後の

日は射す、だが寒い。其處に二通の手紙がついた。一通は君の、そして他の一通は民子さんから  
だ。短い、全文を寫す。

『私は貴方の寛大に感謝いたします。貴方は何と申し上げていゝ方でせう。驚きます。殆んど想  
像し得ない方です。私は先日あなたが仰しやつた言葉をよく／＼考へました。自分の胸に問ひ、  
自分の胸に従へ！ それを考へて丁度氷が解けるやうに分つたのです。私は直ちに貴方の許に行  
つて感謝し、これを述べたいのですが、それは餘りにつらいです。唯々貴方の御友情と寛大な心に  
感謝いたします。私あの方に對しては餘りエゴイステックでした。だがそれは或る事を恐れて、  
それでも訴へずにはゐられないで苦しい時のみ手紙を二三度上げました。それは偽りでした、私の  
胸は今解けたのです。私は三四日中に仙臺に参ります。貴方にはお目にかゝりません。それは餘  
りつらいので、貴方に感謝すればする程つらいのです。お許し下さい、今後も私を友として下さ  
い。又御指導を願ひます。あの方は何を苦しんでなさるのでせう？ 私が何か役に立つ事が出来  
ましたら致します。貴方の無言の命令通りいづれ四五日の中に仙臺でお訪ね致します。今日はこ  
れにてお許し下さい。貴方の心を思ふ程私はこれを書くのがつらうございました。』……

僕は實は二人の手紙を見て、氣が重くなつた。淋しかつた。そして悲しくもある。君はそれを察して呉れるだらう！ 然し悲しいのは僕自身に就いて許りではなかつた。君の事をも、だが僕は君のお母さんに就いては何も云ふ言葉がない。戀愛は無上でないのは尤もだ、だが君と民子さんに於てはさうではない。然し僕は第三者になる方がいゝだらう。

實は、夕方迄どつかり椅子に凭つたまゝ、煙草ばかり巻いてゐた。をり／＼涙がにじみ出さうになる。西の窓から、高い樹木の多い野原に落ちる夕日が見えるのだ。おしんが夕食の知らせに呼びに来た。そして僕を見て驚いてるやうだつた。それから、僕がどの煙草も半分位しか吸はないで處かまはず卓子の上に投げ捨て、置くのを見た。だが、彼女は今日はそれを非難しなかつた。どうかすると無駄な吸ひ方をすると言ふのだ。この小言には理由がある。何故と云つて僕はをり／＼彼女の大切な給金の中から小遣を借りるのだ。今日は黙つてゐた。一度いぢらしいやうな眼で僕を見てから、靜かに御飯ですと云つた。そして薄暗くなつてゐた部屋に電燈をつけて呉れた。

今、これを書いてるのは宵だ。おしんが用事で停車場近くへ行くとドアをあけて告げて行つた。

女主人が夜でも用事を言ひつけるのだが、成るべく僕はついてつてやる事にしてゐるのだ。何故と云つて暗い野道である。僕は先夜、道々「裸の玉様」の話をしてやつた。彼女は喜んだ。僕はこんな生活をしてゐるのだ！

僕を透明で朗かだと云ふ。それは嘘だ。抗議を申込みたい。僕の心はその反對である。また透明で朗らかなになつたら人間は其處でお終ひではあるまいか？ 唯「僕」の感じがさうなのなら喜んで受ける。

おしんが提灯を持つて寒さうに窓の外に廻つて來た。この手紙も、停車場に出すべく終りとする。彼女が窓硝子に顔を寄せて待つてゐるのだ。何だか妙に悲しい。君と民子さんの上に祝福あれ。又書く――

手紙を読み終つて俊一の心は暗く寒くなつた。傳三との友誼がこれで終るのではあるまいかと思はれた。何と云つてもあれ丈けのいきさつがあつた傳三と民子の間である。民子の手紙は餘り思ひ切つてゐるやうである。だがそれも彼女の心に従へば致し方ないのであらう。自分や民子にまだどうと云ふのではないが、結局は三人が三人何れも淋しくて、悲しいのだ、如何ともし難いのだ。

俊一はさう考へながら、坐つてゐた。彼は何處にゐるのかも、同じ家に母がゐるのも忘れて坐つてゐた……

「俊一！」隣室で突然お勢が呼んだ。

「……………」はッ。やつと我にかへつて、彼は身を顛はした。

「……………」俊一。彼が這入つて来るのを、電燈の下で眼を上げて見ながら、お勢がオヅ／＼云つた。「な、黙つてゐたが、どうも秋の頃から、私の身體は悪いのだ、腰から脊骨にかけて折々痛んで堪らないんだが。」

「どうしたんでせう。」疊に坐つた俊一は心配さうに母を見守つた。「お醫者に行つて見たらどうですか？ 何故……………」何故今迄黙つてゐたのかと問ひたかつたが、彼の口は思ふやうに動かなくなつた。

「ウム。お醫者さんさ行つて見たところで、お錢ばかりとられて無駄だと思ふのや。」

「そんな事を云つてられません。」

「ウム。だがな、俊一、Nの温泉な、あの温泉は、こんな身體の痛む病氣には大變効くつて云ふ

が……………」

「それもいゝですが、一應醫者にみせた方がいゝでせう。」

「ウム。あの温泉は大變いゝさうだから、一度行つて見たいと思ふのや。お母さんがまさかの時と思つて四十圓許り藏つて置いたお錢があるから。」

「お金なら僕も少しは持つてます。でも……………」いや、お母さん、温泉へ行つた方がいゝでせう、僕もついでつて上げます。」

「さうか。」彼女の顔には幽かに嬉しさが閃いた。「一遍だけ湯治して見たいと思ふのや。」

「えゝそれがいゝです。僕が會社に出る前に、明日にも参りませう。眞個にそれがいゝです。」俊一は母の病氣が心配なのより、彼女をいたはつて望みの湯治をさせてやられる機會が來たのを非常に喜んだ。

二人は翌る日の朝出發する事に決定した。俊一は狭い自分の部屋に戻つても、帯の間に兩手を挟んで立つたまゝ、落ちついてゐられなかつた。彼は傳三に手紙をかくペンも執る氣になれなかつた。

早い晝飯を済まして、お勢と俊一は北に向ふ箱のやうな汽車に乗つて、並んで腰掛けてゐた。

「今も痛みますか？」俊一は囁くやうに云つた。

「ウムウ、さうは痛まない。」

二人は黙つて、各々眞直ぐを見てゐた。だが、その眼は二人共開いてゐても何も見えないやうだつた。俊一は、並んでる母が何か口の中でブツ／＼咳いてゐるやうに思つたが、黙つてゐるやうにも思はれた。彼は母の顔を見る事が出来なかつた。

次第に雪が深くなつて行く何處迄も白い平野を、一時間餘り走つた。平野のつきた驛で二人は汽車を乗り換へた。

更に汚ない車室だつた。ぬれた藁靴をはいた百姓の女や男が少し許り乗つてゐた。汽車は次第に山道にかゝつた。俊一等の前に、三つ位の女の子を背負つた若い百姓のお内儀さんが坐つてゐ

た。百姓には珍らしい血色のいゝ肥つた善人らしい顔をしてゐる。子供を着物の中に背負つてゐるので、彼女の肩は半分も素肌が出てゐる。だが、別に寒さうでもなかつた。握り飯の包みを出してしきりに背中の子供に食はせ、親子は如何にも満足さうな顔をしてゐた。

「山の神さんは何處で御座りすべ？」その女は俊一に聞いた。

「さア知りませんが。」

「そで御座りすか……お産の神様だツツツけが。」彼女は終りを獨語のやうに云つた。

「山の神さんすか？」突然、怒つたやうな顔をしてる百姓親爺が顔色一つ動かさず云つた。「もう少しですが、右ツ手に見えず。」

「はア有難う御座りす。」

暫くすると先刻の親爺が、「あれツさ。」と右手に顔を向けた。雪に埋れた田の中に杉に囲まれた可なり大きな社があつた。お内儀さんは立つて、窓の處に両手を置いて、その社に向つて丁寧にお辭儀をした。

外は薄日が射してゐた。汽車は山にかゝるに従つて思ふやうに走らなかつた。急に前面の空が

鉛色に濁つて見えた。そして雪が降り出した。後を振りかへると今過ぎて来た邊りは日の光が照らしてゐるのだ。それは雪の夕立のやうだつた。見る／＼中に雪は細かくなり、一間先も見えないやうになつた。まるで下から上がるのか上から降りて来るのか分らなかつた。織るやうにしつきりなしに降るのだ。汽車は益々もがき始めた。やつと一つの驛に着いた。先刻のお内儀さんは雪の降りしきるプラットホームに降つて行く。彼女の髪も子供の顔も見る／＼白くなつた。

汽車は豫定より一時間の上も遅れて目的の驛に達した。然し雪はヒタと止んでその日の最後の薄日がさしてゐた。母をいたはつて俊一は雪が五六尺積つて停車場の前に出た。雪の中の坂道を登つた。兩側の人家もすつかり雪に埋れてゐるが、溝は音を立て、流れてゐた。その上丈け雪が消えてゐるのだ。湯気が登り、そして強い鼻の奥を突く硫黄の臭氣がした。俊一等は一町とは歩かずに、建物許り大きな宿の前に立つた。上り口は雪靴や草靴や下駄と泥まじりの雪に足も踏み入れられない位よごれてゐた。二人は古い汚ない室々、其處には病氣の百姓がゴロ／＼火燵に入つて寝てる前を通り、びしよ／＼にぬれた廊下を導かれた。どんな隅にも硫黄の臭氣が充ち満ちてゐた。段々を登り、又段々を登り新しい建物に通された。新しいと云つても安普請で材木は

割れてゐた。風が吹き通した。そして疊は踏みつけられない程ブク／＼だつた。其處も硫黄の臭氣がした。雪は窓硝子に押しせまつてゐた。小山の中腹に立つてる建物らしく、雪の山は窓から見上げられない程ダラ／＼に高くなつてゐるのが見えた。今にもその雪が崩れて押し寄せれば家も埋まつて了ふやうに思はれた。

お勢は火鉢の側に坐つて満足してゐるやうだつた。俊一は坐る氣になれなかつた。窓から外許り見てゐた。

お勢にうながされて二人は手拭を持つて部屋を出た。草履はびしよ／＼にぬれてゐた。段々の廊下を下るに従つて下から強い硫黄の臭氣が湧くやうに襲つた。俊一の顔は青白くなつて来た。彼は一時も堪へられないやうな氣がした。然し病身らしい瘦せた母親をヂツと耐へながら湯槽迄導いて行つた。石で疊んだ湯槽は數個あつた。何れもぬら／＼した苔が生えてゐるやうに黒く、湯は泥水のやうに濁つてゐた。ある處には湯瀧が落ちてゐる。いづれにも人々は男も女もどつちやに這入つてゐる。多くは百姓だ。而も不具者のやうな者許りだつた。彼は母と共に餘り人のゐない湯槽を選んで身を沈めようとした。ジロ／＼見る眼、頭に手拭を被つて瀧を浴びてゐる人、牡

蠅貝のやうな顔、——俊一は曾て此の温泉は梅毒患者の集まる處だと聞いたのをその時になつて思ひ出した。彼はいきなり湯を出て了つた。身體を拭き、母が何を云ふのかも耳に入らず、着物を引つかけたまゝ飛び出して了つた。彼は部屋にかへつて青白くなつてブル／＼顫へてゐた。母は中々戻つて來なかつた。暗い電燈がついた。彼は火鉢に炭を思ひ切り入れて、上身をのしかけて温めても、身體の顫へは止まなかつた。女中がみすばらしい食膳を運んで來ると同時に、湯でのぼせ上つて頬の赤くなつたお勢が戻つて來た。彼女は満足さうに彼と向き合つて坐つた。彼女の顔は不自然に光つた。絹糸より細い蟲のやうに細かく這つてる血管が頬を赤くしてゐるのである。腰を下げて坐つた湯上りの瘦せ枯れた彼女は羽毛を引きむしつた雛鳥のやうだつた。

「お前何故あんなに早く上つたの、いゝお湯だのに。」

「え………」彼は湯沸しを動かした。

「さア、冷えない中に食べようか。」

二人は無言で食事を終つた。

お勢は疲れが抜けて身體が軽くなつたやうに眼をとろりとさせてゐた。俊一も黙つて坐つてゐ

たが、外の風の音を聞きのがさなかつた。風は窓のすきを顫はして行つた。松の木を鳴らす音がした。粉雪が吹き込んで來るやうだつた。雪は降つてゐるのではない。風の静まつた瞬間、何となく底の方に無味悪く温いやうな所がある氣温だ。これは雪崩れの來る前だ、と俊一は直覺的に天候の變化を感じた。

「今日は湯に這入るのは一度丈けにしてもう寝るとしよう。」お勢が云つた。

俊一は女中を呼んで寢床を入れさせた。

可なり遠くで、海鳴りの音が地を傳はつた。それは俊一が仙臺の山で度々聞いたのだ。然し今この山中で海鳴りが聞える筈はなかつた。矢張り雪崩れだつた。風が止んだと思ふと、幽かに家をゆるがせ、ど／＼と雪の崩れる音が響いて來る。寢床の中で彼は先刻から眠れないでゐたのであつた。母は石のやうにコチンと眠つてるやうだつた。彼は床を並べて、薄い蒲團の下に寝てる瘦せた母親の身體を見なくもあり／＼と感じてゐた。彼は全く青白くなつて齒が合はない程ガタガタ顫へてゐたのであつた。それは寒さのためでも、雪崩れの響きのためでもなかつた。彼は先



刻から思ふまいとしても思はずにゐられなかつた。彼が許しを乞ひ、頭を垂れて、その膝許にかへつた母親は、彼が大なる決心をして戻つて掘り當てた母親は、唯呼吸をしてゐるに過ぎない生きてゐる屍のやうなものだつた。恐ろしい病毒は彼女の血を冒し、骨の髄の髄まで喰ひ込んでゐるのだ。

(おゝおゝおゝおゝ) 顫をガタ／＼顫はしながら彼は呻吟した。外ではまた一としきり雪を飛ばす風が吹き過ぎて行つた。そして遠くで、更に遠くで、雪崩れの音は小止みもなく響いた。(おゝおゝ……) 蒲團を被つても被つても身體が木の葉のやうに顫へるのは止まなかつた。

—了—

大正十一年三月三日印刷  
大正十一年三月六日發行

(定價壹圓五拾錢)

◀ 掘 設 ▶	
著 作 者 伊 藤 靖	發 行 者 東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地 佐 藤 義 亮
發 行 所 東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地 新 潮 社	
電 話 番 町 八 八 八 〇 〇 〇 九 八 七 番 番 番	
番 二 四 七 一 ( 京 東 ) 替 換	

印 刷 所  
東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町  
電 話 小 石 川 五 九 二 番  
富 士 印 刷 株 式 會 社  
印 刷 者 佐 々 木 俊 一

■ 集全藝文界世 ■

- |   |   |  |  |   |   |
|---|---|--|--|---|---|
| 第一編 ■ <b>ボヴリイ夫人</b><br>フロオベル著<br>中村星湖氏譯 | 第二編 ■ <b>ギルヘルム・マイステル</b><br>(前編)<br>ゲエテ著<br>中島清氏譯 | 第三編 ■ <b>神々の死</b><br>メレジユコフスキイ<br>米川正夫氏譯 | 第四編 ■ <b>赤い部屋</b><br>ストリンドベルヒ著<br>阿部次郎氏 共譯<br>江馬修氏 | 第五編 ■ <b>ギルヘルム・マイステル</b><br>(後編)<br>ゲエテ著<br>中島清氏譯 | 第六編 ■ <b>神々の復活</b><br>メレジユコフスキイ<br>米川正夫氏譯 |
|---|---|--|--|---|---|

製上最版六四 \* 錢拾五圓貳冊一 \* 錢貳拾料送

楠山正雄氏譯 — 全部三冊、完了せり —

■ 近代劇選集 ■

全三冊

- ▼第一卷 青い 鳥外八篇(七百七十頁)
- ▼第二卷 シーザーとクレオパトラ 外五篇(八百十頁)
- ▼第三卷 幽 靈外五篇(七百六十頁)
- ▼第三卷附録 近代劇概説 百六十頁

ロマン・ロオラン著 豊島與志雄氏譯 — 全四冊 —

■ ジヤン・クリストフ ■

ユーゴー著 豊島與志雄氏譯 — 全四冊 —

■ レ・ミゼラブル ■

(全部完了)

増版 一冊八百頁  
送料拾貳錢宛

全三冊 總洋布製  
一冊約八百頁  
各冊圓五拾錢  
送料拾貳錢

劇壇の權威者によつて譯出せられたる新界空前の大出版は茲に全部の完了を告げたり。收むる所何れも不朽の古典的名篇にして、其の大部分は其れづの原文より譯出せるものにかゝる。

第二卷 一冊約八百頁  
送料拾貳錢宛

# ■ 新進作家叢書 ■

第一 新らしき家 武者小路實篤	第二 恐ろしき結婚 里見 弴	第三 生あらば 豊島與志雄	第四 大津順吉 志賀直哉	第五 生と死の愛 谷崎精二	第六 結婚の前 長與善郎	第七 暴君 へ 有島生馬	第八 煙草と悪魔 芥川龍之介	第九 夢と六月 相馬泰三	第十 手品 師 久米正雄	第十一 一つの芽生 中條百合子	第十二 神経病時代 廣津和郎	第十三 愛と憎み 江馬 修	第十四 土の靈 野村愛正	第十五 無名作家の日記 菊池 寛
十六 お絹とその兄弟 佐藤春夫	十七 赤い矢帆 江口 渙	十八 イボ夕の蟲 中戸川吉二	十九 不能者 葛西善藏	二十 霰の音 加能作次郎	廿一 歸れる父 水守龜之助	廿二 修道院の秋 南部修太郎	廿三 結婚者の手記 室生犀星	廿四 放浪者富藏 宮地嘉六	廿五 死を待む女 細田源吉	廿六 涯なき路 岡田三郎	廿七 高い山から 宇野浩二	廿八 妹の戀 細田民樹	廿九 勝 敗 須藤鐘一	

定價一冊五錢 郵送料六錢

# 代表的名作選集

第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩	第二 坊つちやん 漱石	第三 蒲團 花袋	第四 透谷選集 透谷	第五 春 (上) 藤村	第六 春 (下) 藤村	第七 わが袖の記 櫻牛	第八 爛れ 秋聲	第九 平 凡 四迷	第十 高野 聖鏡花	第十一 何處へ 白鳥	第十二 今戸心中 柳浪	第十三 耽 溺 泡鳴	第十四 明治詩歌選 六家	第十五 戀さめ 風葉	第十六 別れた妻 秋江	第十七 はつ 姿 天外	第十八 お艶殺し 潤二郎	第十九 俳諧 師 盧子	第二十 煤煙 (上) 草平	廿一 煤煙 (下) 草平	廿二 子規花 枕 子規	廿三 その妹 實篤	廿四 旅役者 幹彦	廿五 物言はぬ顔 未明	廿六 ふところ日記 眉山	廿七 體の皮 小劍	廿八 女役者 俊子	廿九 南小泉村 青果	三十 少年行 星湖	卅一 啄木選集 啄木	卅二 運命の丘 抱月	卅三 和 解 直哉	卅四 末 枯 万太郎	卅五 善心惡心 里見弴	卅六 俊 寬 菊池寛
--------------	-------------	----------	------------	-------------	-------------	-------------	----------	-----------	-----------	------------	-------------	------------	--------------	------------	-------------	-------------	--------------	-------------	---------------	--------------	-------------	-----------	-----------	-------------	--------------	-----------	-----------	------------	-----------	------------	------------	-----------	------------	-------------	------------

明治大正の傑作全集  
定價は破天荒の至廉  
賣高既に百七十萬部

▼▼▼ 羽二重表紙  
一冊五拾五錢  
送料一冊六錢

■ 現代脚本叢書 ■

劇の機運大に動くの時を以て本叢書を發刊せしが、果して異常なる歡迎を受けつゝあり。收むるところ何れも諸家の最も自信ある名篇のみ也。

第一編 未能力者の仲間 武者小路實篤氏著

(附) AとB。或日の出來事。桃色の女。母の心配。

第二編 飢 渴 長田 秀雄氏著

(附) 饑死。大雪の夜。

第三編 法成寺物語 谷崎潤一郎氏著

(附) 十五夜物語。春の海邊。

第四編 鬪 舞 吉井 勇氏著

(附) 葡萄棚。犬。小しんと焉馬。

第五編 阪崎出羽守 山本 有三氏著

(附) 淀見藏。穴。嬰兒殺し。

第六編 雨 空 久保田万太郎氏著

(附) 四月盡。宵の空。雪。暮れがた。火とり蟲。

第七編 秦の始皇 灰野 庄平氏著

(附) 芭蕉と遊女。義隆の最後。少年の道徳。墓の前。其他。

各冊約二百四十頁 \* 價一圓壹圓 \* 送料一冊六錢

506

23

終